

Center for Innovation in Traditional Industries Yearbook 2023

Kyoto Seika University

京都精華大学

伝統産業イノベーションセンター
イヤーブック 2023



伝統産業イノベーションセンター
イヤーブック 2023

Center for Innovation in Traditional Industries
Yearbook 2023

京都精華大学

Kyoto Seika University

伝統産業イノベーションセンターについて

未来の、手仕事のために

京都精華大学が4年制として開学した1979年、学生が伝統産業の工房に通い手仕事の技やその精神性を学ぶ〔学外実習(現:京都の伝統産業演習)〕が開講しました。以来、約40年間で累計4,000名近くの学生がこの演習に参加し、今では京都精華大学の名物科目のひとつとなっています。

身につけた伝統技術を自身の表現に取り入れる学生もいれば、日本文化への関心を深めて研究者や起業家を目指す学生もいました。また、実習をきっかけに職人としての道を歩み始める学生も少なくありません。実習期間はわずか2週間ですが、さながら弟子のように過ごす日々が学生たちに「伝統」と呼ばれるもの一端を伝えています。

実習を契機に、京都精華大学では多角的な視点で伝統産業界との協業が始まりました。製品開発やブランディング、技術記録・調査、職人文化研究など、京都精華大学が誇る5学部それぞれの専門性を活かした取り組みをおこなっています。

伝統産業イノベーションセンターは、これまで京都精華大学が培ってきた伝統産業の知見を集約し、より活発な教育・研究活動に還元するために2017年に設立しました。〔研究〕〔教育〕〔社会連携活動〕を大きな軸として、世界有数の工芸産地・京都を拠点にさまざまな国や地域の手仕事との連携を目指しています。

かつてない速度で暮らしのあり方が変化する時代にあって、1000年前の職人技に挑み続ける伝統産業界の知見は私たちに多くの気づきをもたらします。

技術の背景にある物語や、土地に暮らす人々の営み。
自然素材の厳しさ、身体を動かして汗を流すことの意味。

伝統産業が次代への継承に苦しむなか、大学が「伝統」に学ぶだけの時期は終わりました。
先達への尊敬と深い理解をもとに、文化の本質が受け継がれた「未来」を描き続けることが、伝統の街で育った京都精華大学の使命だと考えます。

About the Center for Innovation in Traditional Industries

For the Future of Handcrafts

The Kyoto Traditional Crafts Internship began in 1979, the year Kyoto Seika University became a four-year institution. Since then, the program has continued to offer opportunities for students to learn techniques and philosophies of handcrafts at traditional workshops and studios. Over the course of 40 years, almost 4,000 students have participated in the program, and it has now become one of the most well-known courses in the university's curriculum.

Some students incorporate the newly-acquired traditional skills into their work, while others go on to become researchers and entrepreneurs with a deeper appreciation of Japanese culture. Inspired by their internship experience, there are also those who pursue careers in traditional crafts. The program is only two weeks, but the time spent as short-term apprentices offers students a glimpse into age-old traditions.

Through the internship program, Kyoto Seika University began collaborating with the local traditional craft industry. Drawing on the expertise of the five academic departments, the university has initiated product development and branding projects, as well as documentation of cultural knowledge and research into the everyday lives of artisans.

The Center for Innovation in Traditional Industries was established in 2017 to compile and utilize the academic resources on traditional industries cultivated by Kyoto Seika University. Located in one of the world's leading sites of craft production, the Kyoto-based center aims to build new partnerships in handcrafts across national and regional borders through research, education and public engagement.

At a time when our lifestyles change at an unprecedented speed, there is much to learn from craft professionals practicing artisanal skills from a thousand years ago.

There are stories, communities and real lives behind every technique.
There is meaning in the harshness of natural materials and in manual work.

We cannot simply learn from "tradition," while traditional industries struggle to pass down its wealth of knowledge to the next generation. As an institution that has grown in a city of traditions, we believe it is Kyoto Seika University's mission to envision a future that inherits the essence of our culture, with respect and understanding of our predecessors.

米原有二

京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター長

2024年元日に発生した石川県能登地方を震源とする地震により被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。一日も早く被災地に穏やかな生活が戻ることをお祈りしています。

伝統産業イノベーションセンターは設立から6年目を迎えました。2023年度は、これまでに継続してきた研究プロジェクト「陶芸家・石黒宗麿と八瀬陶窯に関する研究」をさらに前進させるために力を注いだ一年となりました。

老朽化が著しかった住居兼工房跡「八瀬陶窯」の修繕に着手し、できるだけ往時の姿を留めたまま研究の場として活用するために整備をおこないました。今後、石黒宗麿が遺した陶片や登り窯についての調査や、石黒宗麿の作陶と八瀬地域との関わりについての研究活動に取り組んでいきます。

例年開催しているシンポジウムでは、「八瀬陶窯から芋づる」をテーマに、場所が持つ意味について考え、今後の研究や活用の可能性についてさまざまな立場の方々との意見を交わしました。話題は石黒宗麿の作陶にとどまらず、八瀬地域の伝統建築や民俗、戦前戦後の陶芸界など多岐にわたりました。

石黒宗麿が遺した陶片から始まったこの研究プロジェクトは、年を追うごとに陶芸という枠から大きくはみ出していきます。それは、手仕事について考えるとき、その作者の生活や思想、時代性、交友関係、地域の風土などが切り離せないためです。2023年度はこの学際的な研究方針についての議論に多くの時間を費やしました。

今後は、調査研究の過程についても随時ウェブサイトなどで報告していく予定です。

本センターの活動にご協力を頂いた皆さまに心から感謝を申し上げます。

また、これからも一層のお力添えを賜りますようお願いを申し上げます。



02	伝統産業イノベーションセンターについて About the Center for Innovation in Traditional Industries
04	ごあいさつ 米原有二 Foreword Yuji Yonehara
08	特集= 陶芸家・石黒宗磨および八瀬陶窯に関する調査研究のこれから
18	シンポジウム2023 ROOT(S) 八瀬陶窯から芽づる —— 工芸から覗く未来
19	第1部 八瀬陶窯の見学会
22	第2部 シンポジウム 事例報告
27	第3部 シンポジウム 座談会
36	八瀬散歩 —— フィールドワークと座談会 中村裕太
43	座談会 八瀬から何を掘り起こすのか？
50	研究会 手仕事の学校 School of Handcrafts
54	研究ノート 博物館収蔵の現在 —— 九州大学歴史的什器調査と収蔵方法の可能性 谷本尚子
58	Research Presentation Japanese Traditional Kites: From Regional Studies to the World of Arts Cecile Laly 日本の伝統凧 —— 地域研究から芸術の世界へ セシル・ラリ
63	開催協力 第四回 浮世絵木版画作品展 Cooperation
64	伝統産業イノベーションセンター 学内センター員・職員 Researchers and Staff Member
67	京都精華大学 協定校／機関 Kyoto Seika University International Partner Universities and Institutions



特集

陶芸家・石黒宗麿および 八瀬陶窯に関する 調査研究のこれから





石黒宗麿(1893-1968)は、1936年に京都市左京区八瀬に築窯し、晩年までこの地を拠点に陶器を作り続けました。1955年に鉄釉陶器の技法による重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されるなど、中国や朝鮮の古陶磁に肉迫しつつも、独自のエスプリを持った個人作家として知られています。1956年には自身の工房が後進の陶芸家の研究の場となるべく「財団法人 八瀬陶窯」を設立しています。石黒の没後、八瀬陶窯は関係者の管理を経て、2003年からは京都精華大学が施設管理を行なっています。

京都精華大学では、伝統産業イノベーションセンターが中核となって石黒宗麿および八瀬陶窯に関する調査研究に取り組んできました。とりわけ注力してきたのが、八瀬陶窯で掘り起こされた陶片からみた石黒の陶器作りや、石黒に関する人的なネットワークについての調査でした。それは、断片的な情報をたよりに少しずつ石黒宗麿という人間の生き方を確認していく行為であり、まるで、土から掘った芋の蔓ひとつひとつの行方をたどるような作業でした。2023年度には、工房のある母屋を修繕し、今後は実地的に石黒の陶器作りの調査を行なう研究拠点として運用していきます。

ここでは、これまでの調査研究の概要と今後の展望について報告します。



提供：射水市新湊博物館

研究活動 | 2017—2023

2017年から実施してきた研究は主に「陶片群」「生活空間・工房」「人物像」の3分野から陶芸家・石黒宗磨について調査をしてきました。この3分野の境界は曖昧で、調査内容が相互に影響し合うことはいうまでもありません。石黒宗磨の生活と作陶が地続きだった八瀬陶窯を拠点にした本研究の特色といえます。

これまでに石黒宗磨についてまとめられた資料には、「石黒宗磨書簡集1～4」「石黒宗磨データブック」(監修:小野公久、発行:射水市新湊博物館)、「評伝 石黒宗磨異端に徹す」(小野公久、淡交社、2014年)、ほかに東京国立近代美術館や京都国立近代美術館で開催された回顧展の図録などがあります。本センターでは、これらの基礎資料に加えて、当時の新聞・雑誌記事等から同時代人による石黒評や人的交流についての情報収集や整理を行っています。また、関係者への聞き取り調査では、石黒宗磨の作陶についてのこと以外にも、夫人との生活や交友関係などが少しずつわかってきました。

石黒宗磨についての資料は、同時代に活躍した陶芸家たちと比べてごくわずかです。その理由には、石黒自身による記述がスケッチやメモ、主に支援者に宛てた書簡以外にはほとんど残されていないことが挙げられます。また、石黒夫妻には子どもがなく弟子も少なかったこと、京都の陶芸の中心地である五条坂周辺から遠く離れた八瀬に居を構えていたことなども理由です。いずれにしても、石黒宗磨は作品が高く評価される一方で、作陶技術や生活態度、人柄についてはあまりにも語られてこなかった陶芸家です。

本研究は、陶片群の整理分類と八瀬陶窯実地調査を起点に、従来の記録資料にはない石黒宗磨の作陶風景と人物像を考えることから始まりました。



石黒宗磨 ISHIGURO Munemaro | 1893—1968

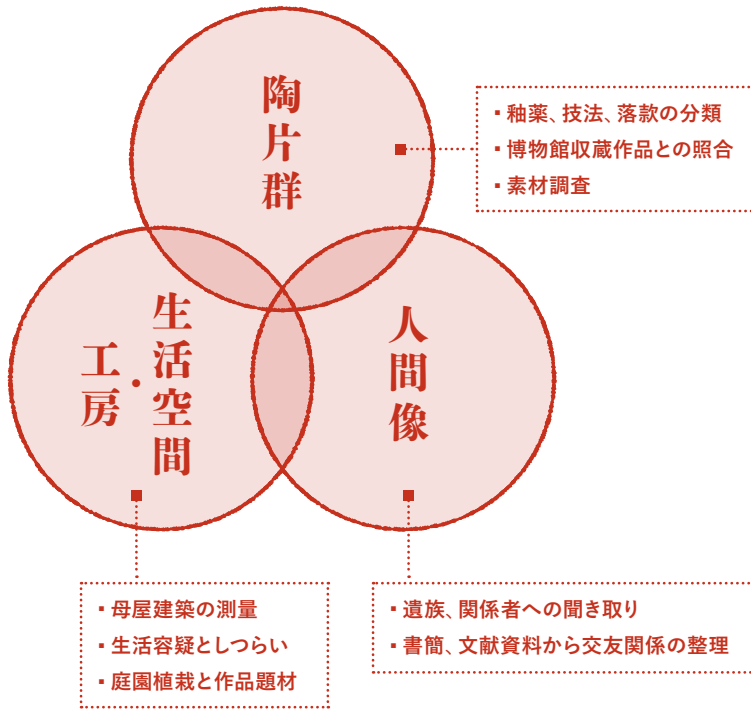
1893(明治26)年、富山県射水郡作道村(現射水市)に医者の子として生まれる。25歳の頃に見た曜変天目茶碗の美しさに感銘を受け陶芸家を志す。東京、埼玉、金沢と転居しながら作陶を続け、1927(昭和2)年に京都市東山区に居を移す。天目釉を中心に東洋古陶磁のさまざまな技法研究に取り組んだが特定の師にはつかず、古陶磁を教材として製陶研究に動いた。1936(昭和11)年には京都市左京区八瀬に築窯した住居兼工房である「八瀬陶窯」で作陶を始める。1955(昭和30)年、鉄釉陶器の技法で重要無形文化財保持者(人間国宝)認定を受けた。1956(昭和31)年に八瀬陶窯を財団法人化し、後進の陶芸家養成の拠点づくりをめざした。



八瀬陶窯 Yase Toyo Kiln 所在地:京都市左京区八瀬近衛町 土地:1514.15㎡ 建物:117.35㎡

1936(昭和11)年、石黒宗磨が43歳のときに京都市左京区八瀬に築窯。以後、暮らしと作陶の場として晩年までを過ごす。庭にはさまざまな木々や草花が植えられ、自然の景色をこよなく愛した文人・石黒宗磨の横顔を今に伝える。石黒の没後、遺族及び工芸関係者で構成する「財団法人 八瀬陶窯」で管理をおこなっていたが、2003年に京都精華大学に寄付。現在は京都精華大学が管理をしている。現在も登り窯周辺から失敗作を割ったと考えられる陶片が多く見つかると、作陶についての記録をほとんど残さなかった石黒宗磨の試行錯誤を知る貴重な資料となっている。





陶片群に関する調査

本研究の端緒を開いたのは、八瀬陶窯の庭部分から発見された陶片群でした。奥村博美教授(芸術学部陶芸専攻／2020年退職)を中心に陶片を技法や釉薬ごとに分類し、石黒宗磨が生涯で挑んだ幅広い技法を整理しました。土中に埋もれていた陶片を掘り出し、美術館や博物館、個人が所蔵する石黒作品との照合も実施しています。この陶片群は石黒自身が制作過程において失敗作として破棄したものだと考えられます。陶片の厚みや色彩などの情報は、技術や試行錯誤についてはほとんど記録を残さなかった石黒宗磨の作陶を知る貴重な手掛かりとなっています。陶片群の発掘、整理作業は継続的に実施しており、これまでに分類を終えた陶片は1000点を超えます。整理、分類を終えた陶片の情報はデータベースに収録し公開しています。



京都精華大学 工芸文化データベース

生活空間・工房に関する調査

母屋には蹴ろくろと囲炉裏がある工房部分と、石黒夫妻の生活が営まれていた住居部分があります。質素なつくりですが、襖の引き手が陶製であったり、囲炉裏裏縁に陶片があしらわれていたりと随所に石黒宗磨の美意識をみることができます(いずれも石黒が自作したものかはわかりません)。母屋については築90年余りが経過して老朽化が著しいことから2023年度に修繕作業を実施しています。今後は修繕時の測量調査の資料化や、修繕時に新たに発見した石黒宗磨の生活用具などの整理もおこなっていく予定です。



八瀬陶窯の修繕

修繕にあたっては往時の様子をできるだけとどめる方針とし、外観や内装に変化が生じないようにしました。石黒宗磨が作陶・生活を営んだ環境を維持し、住居兼工房の全体を研究資料として活用することを目指しました。これにより、当時の写真資料との照合を通して八瀬陶窯の変化(建物、庭園の植生等)や周辺地域の移り変わりに関する調査研究の継続が可能になっています。

修繕作業の様子

重点的に修繕をおこなったのは、とくに損傷がひどかった母屋の床や壁、柱などの構造材です。老朽化に加え、損傷した屋根や壁板から屋内に鳥獣が侵入してさらに母屋内部の損傷が進行するといった悪循環が続いていたため、まずは倒壊のおそれがある母屋の修繕に着手し、加えて電気や上下水道等のインフラ整備を実施しています。

庭園には、石黒作品の題材にみられる柿の木のように、石黒自身が望んで植えたと考えられる樹木が多数あります。庭園整備にあたっては、伐採、剪定の対象となる樹木の選定を石黒存命時の写真との現況の照合をもとに検討しました。

2024年度以降は、八瀬陶窯を研究の場として活用していく予定です。陶片の発掘調査や整理作業はもとより、登り窯やろくろといった作陶設備に関する調査や、八瀬の地域研究などの拠点とする予定です。

八瀬陶窯は、石黒宗磨が再現不可能といわれていた古陶磁の技術に挑み続け、独学で高い評価を得るに至った場所です。今後の研究拠点化にあたっては八瀬陶窯を「古きに倣い、まだ見ぬ表現を生む場」と位置づけて、陶芸のみならず多様な研究・表現活動の拠点となることを目指します。



人物像に関する調査

晩年まで八瀬地域で作陶を続けた石黒宗磨の交友関係を今に伝える資料は限られており、他者との相互作用についてはこれまであまり語られてきませんでした。本センターの研究活動では、関係者への聞き取り調査と書簡等の文献資料を中心に石黒宗磨の人的ネットワークについて調査を行っています。

これまでの聞き取り調査では、石黒遺族や弟子だった方、石黒を経済面で支えた支援者の遺族、交流のあった工芸関係者、八瀬陶窯の近隣住民といった方々のご協力をえることができました。

また、文献調査では石黒宗磨作品・関連資料を多く所蔵する富山県射水市新湊博物館の協力を得て、石黒宗磨が支援者等に宛てた書簡や、作陶の図案や構想を記したスケッチ帖等の調査を実施。石黒宗磨の試行錯誤や関心分野、同時代の陶芸家についての評価なども手掛かりにして、実際の対面の有無を問わず、石黒宗磨が影響を受けた／与えた同時代人の整理を進めています。

2023年からは、八瀬地域についての調査を開始しています。これまで石黒宗磨と八瀬地域の直接的な関わりについては確認されていませんが、陶芸材料や生活文化、自然環境といった有形無形の接点を探っています。

陶片研究から始まった本研究は、多くの関係者の皆さまの協力を得ながら多角的な内容となりました。

現在、2025年の研究成果報告を目標にさらなる調査を進めています。



「石黒宗磨と八瀬陶窯 一五〇年目の窯出し」
ギャラリーフロール 2018



中村裕太「ツボノノナカノハナナダロナ？」
京都国立近代美術館 2020
八瀬陶窯から発掘した陶片を用いた展覧会を開催(2020年12月)



京都国立近代美術館 ABCコレクション・データベース vol.1 石黒宗磨陶片集(中村裕太)



2024年3月15日 京都新聞





工芸から覗く未来

ROOT(S) | 八瀬陶窯から芋づる

日時＝2023年8月26日(土)

第1部 10:00—12:00 八瀬陶窯の見学会(事前申込制)

第2部 13:15—16:00 シンポジウム(事例報告)京都精華大学明窓館大ホール

第3部 16:15— シンポジウム座談会(京都精華大学明窓館大ホール)

会場＝京都精華大学明窓館大ホール(京都府京都市左京区静海市原町)

主催＝京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター

共催＝意匠学会 参加費＝無料(事前申込制/当日参加可)

【シンポジウム】「工芸から覗く未来——ROOT(S) | 八瀬陶窯から芋づる」



石黒宗磨(1893-1968)は、1936年に京都市左京区八瀬に築窯し、晩年までこの地を拠点に陶器を作り続けました。1955年に鉄釉陶器の技法による重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されるなど、中国や朝鮮の古陶磁に肉迫しつつも、独自のエスプリを持った個人作家として知られています。1956年には自身の工房が後進の陶芸家の研究の場となるべく「財団法人八瀬陶窯」を設立しています。石黒の没後、八瀬陶窯は関係者の管理を経て、2003年からは京都精華大学が施設管理を行なっています。

京都精華大学では、伝統産業イノベーションセンターが中核となって石黒宗磨および八瀬陶窯に関する調査研究に取り組んできました。とりわけ注力してきたのが、八瀬陶窯で掘り起こされた陶片からみた石黒の陶器作りや、石黒に関する人的ネットワークについての調査でした。それは、断片的な情報をたよりに少しずつ石黒宗磨という人間の生き方を確認していく行為であり、まるで、土から掘った芋の蔓ひとつひとつの行方をたどるような作業でした。2023年度には、工房のある母屋を修繕し、今後、実地的に石黒の陶器作りの調査を行なう研究拠点として運用していきます。このシンポジウムでは、はじめに、これまでセンターにて行なってきた八瀬陶窯の陶片を用いた研究や展覧会などの活動、五条坂を中心とした京焼の陶工たちと石黒の交流・影響関係を探ることで、八瀬陶窯という場の意味について考えました。

また、伝統工芸を新たな視点から継承している先行事例として、福島県昭和村におけるからむし織の体験生と村人との協働や、郷土玩具の木地師や福祉施設との協働による実験的な玩具制作のアプローチを紹介し、座談会では石黒宗磨の陶器が生み出された八瀬陶窯のまだ見ぬ「root(s)=根、地下茎」を芋蔓式に掘り起こしながら八瀬陶窯がどのような活用の可能性を持っているかを探りました。

第1部 八瀬陶窯の見学会

日時 | 2023年8月26日(土) 10:00-12:00

参加者 | 33名(事前申込制)

レポート文: フォック・チン FOK Ching [京都精華大学大学院芸術研究科]



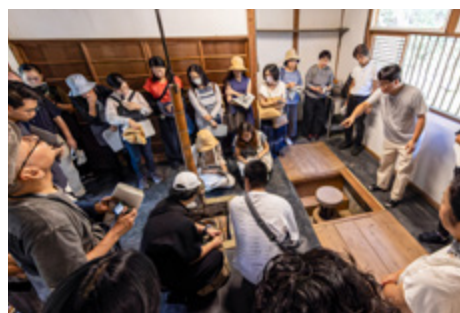
「石黒陶窯 此奥」の道標 撮影:中島光行



八瀬陶窯の母屋 撮影:麥生田兵吾



母屋の玄関に掛けられた扁額「栩庵」 撮影:中島光行



母屋土間の作陶空間 撮影:麥生田兵吾

* * *

シンポジウム当日は八瀬陶窯の見学会から始まった。陶窯といっても、敷地に入って大きな庭と母屋がある構造は、近郊の古民家とそれほど変わらなかった。伝統産業イノベーションセンター員によって最初に紹介されたのは、母屋の玄関に掛けられた扁額だった。紙に墨で書いた書ではなく、一枚板に石黒宗磨の号「栩庵」が質感良く彫られ、手仕事で満ちた家という印象を受けた。玄関から入ると土間の真ん中に囲炉裏があり、その奥の床にくぼみがあることに気づいた。くぼみには、石黒が使用していた蹴回しロクロがある。ここでは、それ以外の作陶道具や土自体がどこにも見当たらないものの、いつでも作業し始められるような雰囲気だった。

* * *

庭に案内されると、植物園にでも入った気がした。母屋のすぐ前に柿や梅の木が育っており、故人が去った今も背筋を伸ばしている。地面には窯道具や大きな器があちこちに眠っている。庭のさらに奥まで行くと、小山に沿って建てられた登り窯が目に入った。窯内の空間は焼成温度ごとに4つの部屋に分かれ、それぞれ匣鉢などの作陶道具が入っている。2018年には京都精華大学陶芸専攻の教員と学生らによる調査で、登り窯の第2室から完成の「木葉天目茶碗」が発見されており、また、窯の周辺からは1000点あまりの陶片が出土している。



石黒が使用していた土練り板 撮影: 麦生田兵吾



石黒宗麿が使っていた八瀬陶窯の登り窯 撮影: 中島光行



登り窯見学の様子 撮影: 麦生田兵吾



登り窯細部 撮影: 中島光行



登り窯細部 撮影: 中島光行



登り窯見学の様子 撮影: 麦生田兵吾

* * *

石黒宗麿が30年間も使用した作業場にある登り窯だから、かなり窯焚きで使い込まれているだろうと思われるかもしれないが、石黒宗麿が実際にこの登り窯を使ったことを証明するのはわずかに数枚の写真と、1955年にNHKが撮影した取材動画くらいだという。

これまでの窯内調査では、窯焚きで出るのは灰がレンガ壁にあまり付着していないことから、この登り窯はそれほど使われていなかったと推測されている。NHKの取材以降、登り窯が使用されていたかどうかは、窯の現状のみでは判断しがたいため、これからは文献を手掛かりに研究を進めるとのことだった。いずれにしても、登り窯は石黒宗麿の制作方法を検証していく手立てとなるだろう。

* * *

母屋に戻り、今度は畳敷きの居間に案内された。居間は2023年度に修繕され、制作やイベントなどで使えるようなスペースとなっている。とはいっても、そこに漂っているのは新築の匂いではなく、家族のためにつくられたような暖かい雰囲気だった。

居間の畳の上には、登り窯から掘り出した陶片が技法の種類ごとに置かれていた。これらは、作品の質に厳しい石黒宗麿が窯から出して割ったもの、つまり不良品として廃棄されたものと考えられている。これらの陶片は、完品の石黒作品と比較して見れば、形状、質感や色使いなど作品の選別基準が見えてくるため、今後の研究によって貴重な資料になるだろう。



母屋の居間 撮影: 麦生田兵吾



窯周辺から掘り出した陶片の一部 撮影: 麦生田兵吾



大屋峻氏が持参した当時の写真 撮影: 麦生田兵吾



大屋峻氏が持参した当時の写真 撮影: 麦生田兵吾



梅ソーダを飲みながら八瀬陶窯を体感した 撮影: 麦生田兵吾

* * *

センター員らが石黒宗磨の母屋での生活について話していると、石黒存命時に八瀬陶窯を訪ねたことがある大屋峻氏(参加者)が当時の写真を見せてくれた。大屋氏の祖父は石黒宗磨の支援者だったという。古い封筒から出された写真は一枚一枚丁寧に台紙に貼られ、その横に日付や当日の出来事が書かれている。石黒宗磨が出品した展覧会のことや、自身が八瀬陶窯を訪ねてきた時のことなど、大屋氏は写真を指差しながら思い出を語った。

* * *

見学会は石黒宗磨の作品に関する芸術的分析はほとんどなく、生活の周縁から石黒宗磨という人間を知ろうとする試みだった。今を生きる世代にとって石黒宗磨から学ぶことは、技術や制作意図だけではない。それよりも、八瀬陶窯の梅の木から収穫した梅をシロップに漬け込み、当日、参加者たちに振る舞われた冷たい梅ソーダように、体感でしか得られないものかもしれない。

第2部 シンポジウム 事例報告

日時 || 2023年8月26日(土) 13:00-16:00

参加者 || 55名(事前申込制)

登壇者 軸原ヨウスケ デザイナー

鞍田 崇 哲学者

清水愛子 研究者

中村裕太 美術家/伝統産業イノベーションセンター員

レポート・文: フォック・チン FOK Ching [京都精華大学大学院 芸術研究科]



登壇者(左から) 軸原ヨウスケ、鞍田崇、清水愛子、中村裕太 撮影: 斐生田兵吾

登壇者プロフィール

軸原ヨウスケ [デザイナー]

1978年岡山県生まれ、岡山在住。「遊びのデザイン」をテーマにしたデザインユニット「COCHAE(コチャエ)」のメンバー。グラフィックデザインにとどまらず、紙雑貨やパッケージのデザイン、出版企画や商品開発など幅広く活動中。著書に『kokeshi book 伝統こけしのデザイン』(青幻社、2010)、『カワイイナリガミ細工』(誠文堂新光社、2016)、『アウト・オブ・民藝』(著書、誠光社、2019)など。

清水愛子 [研究者]

京都工芸繊維大学大学院博士後期課程修了。現在、京都芸術大学、広島市立大学非常勤講師。京焼の近代化に関する研究と共に、これまでの革新的な京焼の歴史を受け継ぎ、「京焼今展」や「京都・五条やきもの市」など、今という時代にかなった新たな試みを支える活動を行っている。共著に『京都 伝統工芸の近代』(思文閣出版、2012)、『京都 近代美術工芸のネットワーク』(思文閣出版、2017)など。

鞍田 崇 [哲学者]

1970年兵庫県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科修了。現在、明治大学理工学部准教授。近年は、ローカルスタンダードとインティマシーという視点から、現代社会の思想状況を問う。著作に『民藝のインティマシー「いとおしさ」をデザインする』(明治大学出版会 2015)、『からむしを續む』(著書、渡し舟、2021)など。民藝「案内人」としてNHK-Eテレ「趣味どきっ! 私の好きな民藝」に出演(2018年放送)。

中村裕太 [美術家/伝統産業イノベーションセンター員]

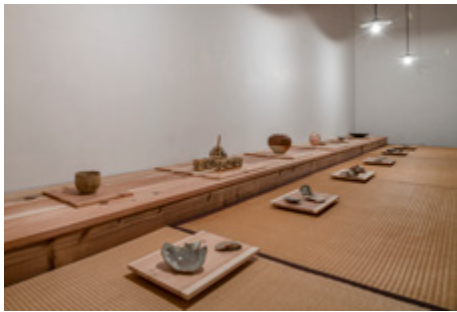
1983年東京都生まれ、京都在住。京都精華大学博士後期課程修了。博士(芸術)。京都精華大学芸術学部准教授。〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点から陶磁器、タイルなどの研究と制作を行なう。展示に「ツボ_ノ_ナカ_ハ_ナンダロナ?」(京都国立近代美術館、2020)、「MAMリサーチ007:走泥社—現代陶芸のはじまりに」(森美術館、2019)など。著書に『アウト・オブ・民藝』(著書、誠光社、2019)。

* * *

見学会に続き、京都精華大学明窓館大ホールにてシンポジウムが行われた。伝統産業イノベーションセンター員とゲストそれぞれの活動を始め、石黒宗磨と八瀬陶窯から京都の陶芸、民藝や農業へと話が広がった。まず中村裕太がイントロダクションとして伝統産業イノベーションセンターの八瀬陶窯研究と過去の関連プロジェクトを紹介した。

* * *

2018年に登り窯の第2室で発見された「木葉天目茶碗」このは てんもくちやわんを初めて展示したのは「石黒宗磨と八瀬陶窯 —50年目の窯出し—」展(2018年、京都精華大学ギャラリーフール)



再現された母屋の居間 2018年
京都精華大学ギャラリーフール 撮影:表恒匡

だった。この展覧会では、木葉天目茶碗に加えて、石黒宗磨の陶片群も展示された。この展覧会で興味深いのは、八瀬陶窯の母屋にある居間が実寸でギャラリー内に再現されたことだ。そこで来場者は陶片に触れながら、手のひらにある陶片と同じ技法や模様で作られた石黒宗磨作品を鑑賞した。このようなふるまひは、石黒宗磨自身も創作の日々に繰り返していたのではないだろうか。

* * *

2020年に開催された展覧会「ツボ_ノ_ナカ_ハ_ナンドロナ?」(京都国立近代美術館)では、中村裕太が現代美術の視点から石黒宗磨の陶片を展示した。この



石黒の陶片を「触察」する 2020年 京都国立近代美術館 撮影:表恒匡



京都の陶芸史を遡る 撮影:麥生田兵吾



福島県昭和村の「織姫」滞在体験制度を紹介 撮影:麥生田兵吾

展覧会は作家(Artist)、視覚障害のある方(Blind)、学芸員(Curator)が協働する京都国立近代美術館の「ABCプロジェクト」の一環として行われたため、目で観察する代わりに「触察」をした成果発表となった。視覚障害のある方が触察する記録映像を観ながら、来場者は同じように、陶片を手にとって触感を感じ取る鑑賞体験をした。

* * *

京焼研究者の清水愛子氏は「京焼と石黒宗磨」のテーマで、同時代の陶芸家の仕事、およびそれらから見た石黒宗磨の作風と人柄を紹介した。京都で活躍していた作家との関係性を見ていくと、石黒宗磨という人物について、山田喆は「雅陶だな、あの人は」と表現し、八木

一夫は「現代そのものに生きている感覚や、瀟洒な好み、造りのたしかさと柔軟性」と形容したという。いずれも、石黒宗磨の作陶は「美」ではなく「味」のあるものだという印象が共通しているようだ。

清水氏からは、石黒宗磨が京都に来た時代に、陶芸が絵画や彫刻と同様に創作性を求められるようになったことが背景として挙げられた。一方で、同時代に民藝運動に関わっていた河井寛次郎は「美を追わない仕事、仕事の後から追ってくる美」をもとめ、主流の創作理念から分岐した考えを示したことも指摘した。

そこで、清水氏は「現代の文化でよく語られる「個性」や「独創性」というようなものとは明確に違うものを大切にし、

追い求めておられた」(『石黒宗麿と八瀬陶窯—50年目の窯出し—』(2019)より)という染色家の森口邦彦の言葉を引用し、石黒宗麿の作陶の独特さを強調した。

* * *

この態度は、まさに失敗作を割りながらも作陶を続ける石黒宗麿の人物像である。職人のこだわりとも呼べそうなものだが、八瀬陶窯の環境を考えると、やはり石黒宗麿の暮らし方でなければ持てない心構えだと思ふ。清水氏の祖父の清水卯一は数か月の間、八瀬陶窯で石黒宗麿の仕事を手伝っていたが、その後も書を書いたり畑仕事をしたりし、生活全般において影響を受けていたという。石黒宗麿の芸術が暮らしに密接

しているなら、今後の石黒研究もその暮らしぶりに注目しなければならないだろう。

* * *

哲学者の鞍田崇氏は「百姓の仕事」をテーマに、福島県昭和村でのフィールドワークについて発表した。鞍田氏は、「百姓になったような人間になりきれないと、土がいうことをきいてくれない」という石黒宗麿の言葉から、百姓とは何かを考察した。陶芸自体がもちろん土でできているが、石黒宗麿の妻、とうが畑仕事もやっていたことにも着目。また、八瀬陶窯に遺された石黒宗麿のものと思われる木の枝を造形してつくった杖についてもふれた。周辺にある素材を生かすことこそ、百姓の仕事のでは



地方の郷土玩具の復元プロジェクトを紹介している 撮影: 麥生田兵吾



福祉施設での郷土玩具ワークショップの成果 撮影: コーダマサヒロ



八瀬陶窯見学会の様子 撮影: 麥生田兵吾



八瀬陶窯の自然環境 撮影: 麥生田兵吾

ないかと鞍田氏は考えたという。

その例として、鞍田氏は研究で通っていた福島県奥会津地方にある昭和村を挙げた。今でも昔ながらの手作業で学麻繊維を産出している昭和村に、地域の過疎化と和装産業の収縮への対策として「織姫」という1年間滞在体験制度が設けられている。滞在をきっかけに移住してきた若者が何人もいたが、その最も大きな理由は技術自体ではなく、村での人々の関わり方、共同作業や助け合いに惹かれたのである。河井寛次郎らが強調してきたように、仕事と暮らしはお互いに密着しているのである。鞍田氏は八瀬陶窯が「作るのではなく生きる」という営みに触れられるところであり、自身の生き方を

取り戻していくような場所になるようにと願っていた。

* * *

デザイナーの軸原ヨウスケ氏は「福祉と玩具と工芸」をテーマに、民藝研究や玩具開発など自身の活動を発表した。民藝とは民衆的工芸だが、民とは何だろうか。「民」の古字は視力を失わされた人を示すため、社会的に弱い立場にいる人たちのことを指しているのではないかと軸原氏は考えた。また、民藝運動の関連人物の式場隆三郎がアウトサイダーアートに関心を持っていたことや、吉田璋也が障害をもった子供が作った一心焼を愛したことなどに、民藝運動と福祉の接点が生まれるという。

* * *

民衆と玩具の関係を、農閑期の農民に美術講習を施し、都市部で販売した山本鼎による農民美術運動や、郷土玩具を現代的にデザインしアップデートした有坂與太郎による創生玩具運動から考察した。現在、各地の郷土玩具は日々廃絶を続けている。そこで軸原氏は廃絶した郷土玩具と同じ地方の福祉作業所などの連携で郷土玩具を復活させることなどを提案している。さらに利用者がデザインした張り子を3Dプリンターを使って制作している奈良県の福祉施設 Good Job! Center で、こけしの絵付けや玩具作りのワークショップも行っている。主催者も参加者も模索しながら作った、素直で可愛い



母屋の修繕に関わった武田俊彦氏 撮影: 麥生田兵吾

* * *

シンポジウムに続き、八瀬陶窯今後の行方について参加者と意見交換が行われた。八瀬陶窯の研究において、調査と修繕以外にも、伝統産業イノベーションセンターはコミュニティづくりなども検討しているという。実際、八瀬にお住まいの方から、子供たちの散歩に使用できるようになってほしいという声も出た。それに、登り窯の使用を再開するという意見もあったが、1967年に京都市内での登り窯の使用が禁止になったことが説明された。それ以外に、今後八瀬陶窯で人間関係を築くこととして、地元の方々となんらかの催し事をする手もありそうだ。

陶芸は土を触る仕事で、石黒も半農半陶のような生活だったということから、土地全体の活用を考えて敷地に畑を作るといった研究員の提案もあった。それに対し、子供時代に八瀬に訪ねていた大屋氏は、当時の人にとって農業は生きるためにしなければならないことだったと強調した。農作業は妻と弟子しかやっていたと証言し、石黒がライフスタイルとして農作業を好んでいたか疑問を持っているという。そこで、母屋の修繕に関わっている武田俊彦氏は八瀬陶窯の現場に居続けることの重要性を指摘した。コミュニティとの交流も

手作りこけしの写真で発表をまとめた。

* * *

本研究の目的は石黒の名声や仕事の功績に対する評価ではなく、八瀬陶窯という石黒の生活環境にフィールドを開くことのような。今日における石黒研究の必要性は、おそらく人間国宝だからではなく、日本社会全体で都市的な暮らし方を見直す風潮があるからではないだろうか。当日の登壇者4人の研究は一見それぞれ違うが、実はどれも職人技や美的追求を、我々が生きている日常につなげる試みである。そういう研究こそ、豊かな暮らしにつながるだろう。



石黒宗磨との思い出を語る清水保孝氏 撮影: 麥生田兵吾

当然必要だが、毎日のように空間自体の空気を入れ替え、畑仕事の大変さをぜひ体験してみたいという。

* * *

座談会の最後、清水卯一を父とした清水保孝氏は、京都の百貨店で行われた展覧会で「石黒先生の手を支えて送った時、その手がとても温かった」という記憶を語ってくれた。素晴らしい陶器も割れた陶片も、その手によるのである。

今回の見学会とシンポジウムは八瀬陶窯での石黒の暮らしを芋蔓式に話題を広げる試みであるため、石黒や同時代の陶芸作家に詳しくない自分は果たしてどれくらい理解できたのか、疑問を持っていた。しかし、芸術家や研究者だけでなく、京都に引っ越してきた市民として、物作りをし、器でご飯を食べる人として、当日の内容に共感できる場所が多かった。

八瀬陶窯で行われている活動は作家研究というよりも、むしろ作家が残した精神的財産を重要視し、物質的遺物を通じてその価値を活かす事業である。人間国宝から我々への贈り物は、まさに無形な宝だ。したがって、石黒の精神性を理解するために、関係者の証言と土地に残された痕跡を調査しながら、なるべく全面的な人物像を描くに越したことはないだろう。石黒宗磨の時代

の八瀬陶窯の実態をつかめてこそ、昔に対するぼんやりした印象ではなく、今日につながる歴史を語り継ぐことができる。

偉人の住まいに関する保存修復は、博物館のように当時の様子をそっくり再現することが多いが、そのような再現手法は大学や八瀬の方々にとって意味をもたらすことができるだろうか。1956年当時石黒宗麿が八瀬陶窯を財団法人化したのは、陶窯が後世育成に役立つことを望んでいたからだという。石黒の遺物から新しい価値が生まれるように、伝統産業イノベーションセンターを研究拠点とし、各方の意見を取り入れながら、今生きている人々とこれから生まれてくる世代に役立つ八瀬陶窯

を目指したら良いのではないか。

八瀬陶窯の庭で見た柿の木は、今頃はもう実っているだろう。「今」があるからこそ歴史が生きていくと思う。ただ看板に偉人の名前が載っているだけの「活用」ではなく、石黒宗麿の志を真に継承していく仕事と暮らしを楽しみにしている。

第3部 シンポジウム 座談会

日時 || 2023年8月26日(土) 16:15—00:00

登壇者 軸原ヨウスケ デザイナー

鞍田 崇 哲学者

清水愛子 研究者

中村裕太 美術家/伝統産業イノベーションセンター員



シンポジウム 座談会 会場風景

中村——今回、芋づる式でいろいろな文章を拾っていくところから始めてきました。戦前、富樫木人という方が石黒宗磨さんに会いに行ったらけれども、会えないで、その後に記した文章の中で石黒のことをこのように語っています。

「例えば富本憲吉氏のように俊傑な精神もなく、濱田庄司氏のようなダイナミックな迫力もなく、北大路魯山人氏のような透徹とした器用さも持たず、何か物足りないだけだが、しかも石黒さんのやきものには、誰のものよりも茫洋としたところと深い孤独の精神とがある」

——富樫木人「陶人・石黒宗磨 一會はずに歸るの記一」、『美術と趣味』第5巻 第2号、美術と趣味社、1940年

ここで語られているように、(同時代には)富本がいたり、濱田がいたり、魯山人がいたりというなかで、それらとは違うものとして石黒の仕事があったというふうに考えられていました。

また、軸原さんのお話にあったように、当時のいわゆるスタープレーヤーたち以外にも、農民美術のような、民衆の人たちが作っていたようなものもありました。玩具であつたりこけしであつたり。いま、このセンターにおいて八瀬陶窯のプロジェクトを進めていくにあたっては、もちろん石黒の仕事をリスペクトしつつ、(石黒の)陶片も使いながら何かやっていく。けれども、たとえば僕たちが



石黒のような作品を作っていく、写していくことが、必ずしも引き継いでいくということでもないんだろうなと思います。そういった意味でも、軸原さんや鞍田さんのお話には、今後にどう引き継いでいくのか、というアイデアをいろいろもらえたような気がします。

地理的なところでは、(八瀬で作陶していた石黒は)やっぱり五条坂のような仕事とも違います。また、石黒は民藝運動ともそもも合わず、人間嫌いなところもあったりする。いま、石黒の何をどのように引き継いでいけるのか。もしくは、写せないような石黒の仕事というものをどう捉えていくのかを考えることが、まずは入り口にあるのかなと思います。

軸田—— まず畑を作ったほうがいいんじゃない。今回の修繕は朽ちかけていた建物をいたわるという意味でしたが、でも一方で、建物がきれいになっている分、庭がまだ手入れされてない感じがします。今はもう主のない状態なんで仕方ないとはいえ、今後あそこを生かしていく上で、ひとつのアクティビティとして畑があってもいいかなと思いました。かつて、そこで畑が営まれていたってことも踏まえつつ。

それが何につながるかってことは直ちに分からないけど、あの空間全体を考え直す上で、建物は痕跡として残し、土地はもう一度生かすことを考えるというふうに思ったんですね。

軸原—— 石黒さんは沢庵がすごく好きだったって話を中村くんがしてくれたじゃないですか。

中村—— そうそう。石黒さんは沢庵漬がすごく好きだったと文章に残っているんですよ。

軸原—— (八瀬陶窯には)漬物石がそのまま残っていましたから、今も漬けられるわけですよね。

軸田—— そこまでいく？

軸原—— (八瀬陶窯で)大根を作って、漬けて。

軸田—— 清水さん、(祖父の)清水卯一さんは畑もやっちはつたんですか？

清水—— そうですね。昭和45年ぐらいに五条坂から滋賀県に移って、結構大きな土地を買って、そこで作陶しつつ、畑もしつつ。全部ひとりではやっていないですけど。お弟子さんも手伝ったり、祖母が手伝ったり。

軸田—— ちなみに何を育てておられましたか？

清水—— たしか、ほうれん草や人参、大根とか。あと苺も作っていて。苺は子どもたちが喜ぶからだと思んですけど。

中村—— 何のために畑をされてたんでしょうか？

清水—— 今から思うと、石黒宗麿の暮らしや作陶スタイルがあるからこそ、そこにつながったのかなと。(清水卯一は)途中で書も始めたりもしていますし、作るだけでなく、暮らしの部分にも(石黒宗麿の)影響を受けてるような気がします。

中村—— なにか、清水卯一の印象が変わる感じがしますね。

軸田—— でも、土に触る仕事っていう意味では、同じといえば同じじゃないですか。無理やりかもしれないけど。やらない自分が言うのも筋違いかもしれないけど。焼き物として、生業としての土との関わり方だけだと、なにか狭くなっちゃうのかもしれないね。土に対する眼差しが。(畑は)それをちょっと開いてくれる部分とかもあるのかなって感じました。素人ながらに。

軸原—— さきほど鞍田さんが、濱田庄司も畑を持っていたというお話もされていましたね。無上の贅沢だと思う。郷土玩具を作っている人も、ほぼ半工半農なんですよね。戦前(の郷土玩具)のようなあの輝きや素材さがどこから来ているかという、やっぱり土と生きてたからじゃないかなって思います。

中村—— 民藝の作家って(畑仕事をしていた人が)多いんでしょうかね。



鞍田—— どうでしょうね。でも、作家さんたちは分からないけれども、もともと彼らが土地土地の、その民の窯「民窯」というものに注目したときには、その半農半陶的な暮らしのことも含まれていたのではないのでしょうか。そういう暮らしぶりも含めての注目、評価があったと思うんですよ。どこまで農の部分に重きを置きながらだったかは分からないけれども、実情はそうだっただろうと思うんですよ。

中村—— 農業の話じゃないですけども、少し前に石黒宗磨のお弟子さんだった方からお話を聞いたときにも、石黒が粘土を作るとき様子について伺いました。石黒は、唐津のざっくりした土を自分の土としていました。京都伏見の稲荷山でサツマイモを植えるための砂をもらい受けて、それを粘土の中に混ぜて土を作っていたという。

ただ粘土ということだけじゃなくて、そうして農業で使う砂も混ぜながら焼き物を作っていた。そんなことも今の話とつながってくるなと思いましたね。

鞍田—— (第2部の)最後に少し紹介したうちの福祉施設も「ムジナの庭」という名前になっているのは、やっぱり土との関わりのようなことを活動のひとつの軸にしておきたいなっていう思いもあったんですよね。農業とまではいかないにしても。

中村—— 軸原さんが、Good Job! Center¹で取り組まれている活動も、木という素材であることが施設の方たちにとって描きやすいんですかね。もつと近代的な素材に比べて。

軸原—— 木は描きやすそうですね。もちろん紙で練習してから描いていますけど。ただ、コストを安くするために、端材を譲ってもらって、それを削って描きますね。(八瀬陶窯の庭は)梅も柿もとれるそうじゃないですか。干し柿とかもできますね。

清水—— ああ、あの場で収穫したものをみんなで共有しながら食べる会っていうのもいいなと思いますね。電気窯もあるので、そこで作った器で、畑で採れたものを食べる会みたいなことも。大学の教育プロジェクトとしてもよさそうだと思う。

中村—— いいですね。

.....

軸原—— 登り窯に火を入れる可能性はどのくらいあるんですか。

中村—— だいぶハードルが高そうな感じがします。

鞍田—— 条例的な規制ってこと？

中村—— そう。京都市ではかつて五条坂を中心に登り窯で焼かれていたんですけども、1970年代から公害問題で登り窯は使えない²ことになっています。清水さんは五条坂の登り窯の復興についての活動もされていますね。

清水—— 10年ぐらい前だったんですが、かなりいいところまでいきました。市長も応援してくれるぐらいのところまで。でも、やはり地元住民の方々の反対があつて。

鞍田—— 今朝、ここ(京都精華大学)の近くに民藝ゆかりの上田恒次さんという方のお宅があつて、そこで少しお話を伺ってきたんです。上田さんは河井寛次郎さんのお弟子さんだった方です。上田さんが亡くなられたのは1980年代の中頃ですが、お孫さんはその頃のことをよく覚えておられました。上田さんが亡くなられる前の年に登り窯に火が入っていたっておっしゃっていました。

岩倉はできたんだつたら、八瀬でもできるかなと思つたんですけどね。でも、今と違って30数年前はもつと家もまばらで、田んぼばかりやつたということもあるかもしれませんが。(石黒存命時の)八瀬の写真を見ると、農家がポツンポツンと並んでいる感じやつたけど、今はああいう感じじゃないから。

中村—— 今朝の八瀬陶窯の見学会の前にも、地元の方ともお話をして、当時の周辺の様子なども伺ったりしていましたが、登り窯の使用については賛成とまではいかないにしても、「ああ、いいですね」みたいな反応もあつたり。

語弊があるとよくないですけど、条例はもちろん守りつつ、地域の方々と話し合いながら考えていくべきことだと思います。

軸原—— 地域の方たちと一緒に皆で器を作ってみるとか。地域の皆さんに自分事として参加してもらおう。

中村—— どうでしょう、米原さん(伝統産業イノベーションセンター長)。こういうアイデアいけそうですね。

米原—— 夢がありますよね。ただ、やっぱりやっぱり条例のことは難しい。それと地元の皆さんのご理解を得るのも



簡単なことではないと思います。

でも、私も八瀬陶窯に関わるようになって7年くらいになりますが、あらためて思うのは、この場所には現代の社会的な役割が必要なんじゃないかということです。八瀬陶窯の主である石黒さんが亡くなって55年が経ちますが、それ以来、あの場所は役割を失っている。「かつて、石黒宗麿の住居兼工房だった」というまま、今に至っている。もちろん研究の場として施設環境の保全是大切なのですが、今を生きている人々にとっての学びの場であったり、頼りにされる場であったりもいいのではないかなと思っています。登り窯の使用についての質問にちゃんと答えられていませんね。でも、八瀬陶窯についてはたくさん夢をもって皆で考えていきたい。それができる場所だと思っています。

鞍田—— 建物の修繕作業を手伝ったのは学生さんですか？障子を貼ったり。

中村—— 陶芸専攻の大学院生とかです。

鞍田—— 今も陶芸の学生たちが中心になって関わっているの？

中村—— 今回は掃除の手伝いぐらいですね。奥村博美先生³がおられるときは、学生を八瀬陶窯に定期的に呼んで、土を掘ったりということをやっておられましたね。

鞍田—— せっかく学生もいるし、まずは若い人たちが関わっていくことから。「学びの場」という位置付けがあるんじゃないかと思うので、石黒さんのことや登り窯のことなど、キャンパスで学ぶよりも実践的がいいですね。

米原—— 人間環境デザインプログラム(デザイン学部建築学科)の授業で少し活用されていますね。空間や庭園についての授業で、庭師さんに講師に来ていただくこともあった聞いています。実際に八瀬陶窯の庭に手を入れるわけではなく、学生たちの思索の場として活用されています。

中村—— とりあえず、畑と登り窯ですね。

軸原—— 登り窯は、お祭りみたいに年に1回って決めてしまって、皆が集まる晴れの日みたいにしちゃうとやりやすいのかもしれないね。

中村—— こけし祭り⁴とか、そういうような立ち上がりなんですか。

軸原—— こけし祭りは、この前コロナで数年ぶりに復活したんです。商店街を封鎖しての練り歩きなんかをしますね。(こけしをかたどった)張りぼてというものを着て。もともと仮装大会みたいなものですね。始まったのは戦後、1947年からです。それと実際にこけしを販売する。

.....

中村—— 少し話がそれるかもしれないですけど、1920年代に今和次郎という民俗学者が、日本各地の民家を見て回るプロジェクトを柳田國男とかと一緒にやっていたんですね。そのときに八瀬にも来られていて。これが(図版)「京都八瀬の家」。



今和次郎『日本の民家』鈴木書店、1922年

当時、こういう感じの場所があつて、なんかね、かやぶきの感じとかも八瀬陶窯にけっこう似ていると思うんです。今日の話もそうですけど、八瀬陶窯の庭から、さらに「八瀬」という地域へとぐっと視点を広げていくということも大切だなと思うんです。

鞍田—— うん、石垣とか似ているね。

中村—— 八瀬は民俗学的に見ても面白い地域でもありますし、こういった八瀬のフィールドワークをしていくのも、今後のひとつの視点になっていくと思います。

鞍田—— エリアっていう視点は大事。やっぱり焼き物って個々のアイテムにまずは話がいじやないですか。壺だったり、お皿だったり。

でも、作っている現場は、庭や地域の環境があつたりして、本当はそういうこととの関係性の中で最終的に個々の壺や器になる。そういうことを考え直すことも大事だと思う。生態系みたいなものとか。八瀬陶窯は、八瀬にもともとある文脈のうえで石垣があり、茅葺きがあり、という建物じゃないですか。そういう文脈性みたいなものがあつて、でも、そこで石黒がやっていた作業は彼のこだわった焼き物なんだけど。つい、僕らはそこばかり見ちゃうけど。

でも、そこの土地に溶け込んでいくような姿勢みたいなものが、それこそ焼き物や工芸やデザインの学びの上で結構大事になるんじゃないかな。なんていうか、つい、机の上のことばかりやっちゃうじゃない。

中村—— 実際に、石黒が何を見て、どう歩いて、その地域と出会っていたか。そして、たとえば、それが器の模様のどう

いところに反映されてるかっていうところを、生活の部分から考えていく。

八瀬陶窯の石垣に登ったところの地中に水瓶のような壺が2つ埋まっているんですが、それは生活用水として使うためじゃないか、という考え方もあります。その一方で、水が溜まると鳥がやって来て水浴びをするからなのかもしれない。石黒の作品には鳥の模様もけっこうありますし。畑のような模様の鉄絵の作品は、畑がそばにある生活だったからかもしれないとか。作品や模様が生まれてくる背景みたいなものを、生活から探していくってのは、すごく面白いなと思います。

鞍田—— (図版を指して)でも、この「八瀬の家」は、八瀬陶窯に本当に似てるね。庭に壺なんかを埋めているのは石黒の工夫かもしれないけど、(庭や家屋は)八瀬に当たり前にあった佇まい。びっくりするぐらい似てるなと思って。

中村—— 今和次郎の調査の後に、早稲田大の中谷礼仁さんとかが、『今和次郎「日本の民家」再訪』っていう本をまた書かれています。もう一度、各地を回って、かつて図版で紹介されたそれぞれの家がまだどれだけ残っているかっていうのを調査されたりして。そういった眼差しもすごく面白いなとも思いました。あと、話は変わりますが、石黒さんはけっこう犬好きだったのかも面白い。

鞍田—— 清水卯一さんは犬を飼っておられた？

清水—— 飼っていませんでした。

中村—— 石黒さんは最初は大原孫三郎からシェパードを譲り受けて、それを亡くしてしまったり。その後も、すごく高額で犬を買って、奥さんには言えずにいたりとか。(経済的に困窮して)窯を焚く余裕もなかったときに、自分たちの食事よりも、犬の餌をやっていたり。(陶片を指して⁵)これは、犬なんですよ。可愛い、垂れた耳のようなものが描かれていますね。石黒の作品ではあまり確認出来ない作例ですが、(八瀬陶窯の調査で見つけた)陶片では、このようなもの出てきました。

あと、芋づるにつなげると、この陶片⁶の模様は芋版なんです。年賀状と同じ。芋を切って、それに彫刻刀で文様を彫って、焼き物に判で押していくという芋版技法。それが、八瀬陶窯の畑の芋なのかどうかは分からないですけども、文様を作る上でそういう加工をしていたっていうのも面白いところだと思います。

この陶片⁷には、八瀬陶窯の庭の柿の木と母屋が描かれているようなものが残っていたり。そういう生活の部分から考えると、また少し違う石黒像が見えてくるような気がしますよね。

鞍田—— 今日お越しの皆さんから「八瀬陶窯のこういう使い方があっていいんじゃないか」というご意見はありませんか。

中村—— ご提案やご感想、ご質問などいかがでしょうか。

来場者A—— 京都市内から来ました。(八瀬陶窯の)すぐ近くで「森のようちえん(どろんこ園)」という施設を運営しています。今後、もしよかったら子どもたちのお散歩道にしたいなと思っていました。

鞍田—— ああ、いいな。

来場者A—— 大学の施設管理上とても難しいことかもしれませんが、子どもたちにああいう場所を見せて、記憶に残してもらって原体験は貴重です。幼稚園児たちのお散歩がもしできそうなら、と思って提案させていただきました。

中村—— 修繕作業のときも、かわいいお子さんたちを連れて見に



玄関先の水瓶 撮影:中島光行



5 | 八瀬陶窯から掘り起こされた陶片(犬の意匠)



6 | 八瀬陶窯から掘り起こされた陶片(芋版の意匠)



7 | 八瀬陶窯から掘り起こされた陶片(柿の木と母屋の意匠)

来られていましたね。大学としてどのように取り組めるかは、ここで僕からは何もお約束できませんが、地域でもうすでに活動されている方々と関わっていくということについては、すごく可能性をじています。

今日、見学会にご参加頂いた方のなかにも、子どもの頃に(八瀬陶窯に)来たことがある方おられて、スイカを冷やして食べた思い出を教えてくださいました。そういう生活が営まれていた場所でもあるから。だから、研究者やアーティストだけがあそこに行つて物を作るということじゃなく、開かれた場としての可能性を感じています。今後いろいろと交流ができればうれしいです。

米原——あの場所はたくさんの人にとって大切な場所にしたいと考えています。大学が管理する施設ではありますが、私個人としては公共的な意識を忘れずにいようと思っています。

ただ、現実問題いろいろ難しいこともあります。たとえば、あの場所で事故があったら、そこに小さなお子さんがいたら、と考えてしまいます。私たちが今後の八瀬陶窯の使い方を模索しているところです。ですので、地域の皆さんのご希望をすぐに実現はできないかもしれませんが、たくさんご意見ください。私たちがちよくちよく八瀬へ行きますので、またお話ししましょう。

来場者A——畑の作業を子どもたちも一緒にさせていただけたらいいなと思いました。

鞍田——ああ、いいね。子どもの目線は、僕らが当たり前とと思っていることを教えてくれると思う。すごく良い視点をご提供いただいた気がします。

来場者B——石黒さんが八瀬を選んだ理由を知りたいです。八瀬は独特の文化をもった地域ですが、石黒さんが八瀬の地域性や生活文化を好んで住まれたのでしょうか。

中村——石黒本人が八瀬の文化を石黒自体がどこまで理解をしていたのかっていうのはなかなか分からない部分があります。石黒が八瀬に築窯する以前は、「蛇ヶ谷」という今熊野や泉涌寺の周辺で作陶していました。それが1920年代ですね。八瀬には1936年に引っ越してきます。

そのときにはパトロンという協力者の方がおられて、その方と一緒に陶芸を始めるような場所として八瀬が選ばれたそうです。その方が、パトロンの土地や工房を石黒に与えて、初期の頃は一緒に制作もしていたようです。その方が亡くなった後に、石黒が土地と工房を引き継いでいったということですね。

ご質問にあった、石黒と八瀬の地域文化との関わりについては分からないのですが、このプロジェクトではそうしたことも考えていきたいと思っています。今後、民俗学の研究者と一緒に八瀬地域のリサーチなども計画しているところです。石黒宗磨研究だけでは分からなかったことが、八瀬地域研究で分かるといったこともあるかもしれない。生前の石黒さんを知っている人に出会ったりなど。探っていきます。

中村——大屋さん、もしよろしかったら一言頂いてもいいでしょうか。

来場者・大屋氏——私は、小学校のころから年に2～3回あそこ(八瀬陶窯)へ行つて、夏には高野川で泳いでいました。私は西本願寺の近くに住んでいるんですけども、あそこは私にとって田舎なんです。私は親の田舎とかいうのがなかったもので、あそこが田舎でした。非常に楽しかったです。

今日のお話で、ひとつだけすごく気になったことがありました。石黒さんが農業を好んだのでは、ということでしたが、昭和15年ごろの日本人が家を持って、そこに広い場所があったとしたら最初に何をしたら良かったかと考えると、(農業を)せざるを

得なかったんじゃないかな。私は少し下の世代ですけれども、物のない時代を生きてきた人間としてそう思います。私が小学校に入ったのは昭和24年ですが、山科の学舎に畑があつてそこで芋を毎年作っていました。それ自体は楽しいですよ。農業は楽しいけれども、農業をしていたということと、農業を好んでいたということはきちつと分けておかないと。

私には、石黒さん自身が農業をしておられた記憶がほとんどないです。お弟子さんと石黒さんの奥さんがやっておられました。私は、祖父と一緒に(八瀬陶窯に)行つていたので、(石黒宗磨は)祖父



と話をするために、農業のことはやれなかったのかもしれないけれども。でも、記憶では、お弟子さんと、奥さんのお二人が農業をされていましたね。

今の若い方が、あそこ(八瀬陶窯)を見たときに、そう(農業を好んだのではと)感じるのはいいんですが、(実際に石黒宗磨が)農業を喜んでやっていたかどうかは全く別の話。腹に物を入れるためにやっておられたんじゃないかなと思います。今日、ここにいる中ではどうも私が一番年寄りのようなので、年配者としての意見です。

中村—— 貴重なご指摘をありがとうございます。確かにその時代を考えたときに、好きという言い方は違うというか。というより、やっぱり生きて、それこそ生きる上での農業であったってところで、確かににお弟子さんや奥さまを中心にされていたのは確かだと思います。それであっても、畑が作陶する空間の近くにあるということは、何か影響関係があったと考えることもできるかなと思います。

鞍田—— 貴重なご指摘を頂きました。僕が足繁く通っている昭和村でも、今でこそ手仕事がいすべくの対象にはなっているけど、80代、90代の世代の方々の話を聞くと以前はもう嫌で嫌でしょうがなかった、やらなきゃしょうがないからやっていたと、おっしゃる方もいらして。「その土地に根差した暮らし」っていう聞こえがいいようだけど、それは裏返すと土地から離れられない暮らしでもあったってことだと思うんですね。それは本当に大事なご指摘をいただいたなと思いました。ありがとうございました。

.....

中村—— (来場者の)清水保孝先生、石黒宗磨さんと清水卯一さんについて、何か思い出されるようなことがありましたら一言頂けませんでしょうか。

清水保孝—— 石黒宗磨先生は、私が学生のころに亡くなっているんです。私が小学校の頃、石黒先生がよく五条の卯一(父の清水卯一)の登り窯で作ったものを焼くために、お弟子さんと運んできたんですね。石黒先生は足が悪うてもう自分で窯が焼けないのか、それか、八瀬の窯は温度が上がらへんのもうやめはった、ということをお父さんから聞いた覚えがあるんですけども。石黒先生は、うちの家でなんにもしゃべらんと怖い顔してはる「怖いおじいちゃん」やなとぼつかし私は思っていました。

ところが、(私が)高校生ぐらいのときかな。京都大丸であるグループ展があったんですが、その帰りに、「手を繋がない歩けへん」と言わはって、私は手をつながしてもらおうなんです。ほんなら、「うわっ、温い手なんやな」と思って、ひよつとしたら熱があるのちゃうかなと。

それまで私にとっての石黒宗磨っていう人物は、「怖いおじいちゃん」というイメージでしたので、手を繋ぐなんて思うていませんでしたから。そのことが今でも印象に残っています。

石黒先生が亡くなった後は、奥さんが畑をずっと続けてはりました。せやから、私も八瀬に行って、水撒きぐらいはさせてもらっていました。

中村—— ありがとうございます。今日はとりとめの話から始まって、最後に八瀬陶窯という場における畑について話が広がりました。今後もそこはひとつの入り口として、皆さんにも引き続きいろいろ関わって頂きながら活用を考えていきたいです。今回は八瀬陶窯という場を考えるキックオフ的な機会としてこのシンポジウムを企画しました。これからも温かい目で見守っていただけたらと思います。ご登壇いただいたお三方とご来場の皆さまどうもありがとうございました。



1 | Good Job! Center KASHIBA | <https://goodjobcenter.com/>

2 | 1971年(昭和46)「京都府大気汚染防止条例」の施行により登り窯の操業が大幅に制限され、その後すべての登り窯が廃止。

3 | 奥村博美 | 1996年より陶芸専攻教員。2020年に退職。

4 | 全国こけし祭り | 宮城県の鳴子温泉で毎年秋に開催。





八瀬散歩

——フィールドワークと座談会

中村裕太 Yuta Nakamura [美術家/伝統産業イノベーションセンター員]

本年度後期のプロジェクトでは、これまで八瀬集落のフィールドワークを行われてきた菊地暁さんと本橋仁さんをゲストにお迎えました。当日は朝からの大雪でしたが、八瀬比叡山口駅を出発し、八瀬天満宮までのおよそ2.5キロの散歩の様子を振り返っていきます。八瀬陶窯での座談会では、お二人が関わられた瀝青会著『今和次郎「日本の民家」再訪』（平凡社、2012年）での研究手法を手がかりに、八瀬という場所から何を掘り起こすことができるのかを話し合いました。

写真：夢生田兵吾 同行者：米原有二、小出麻代

フィールドワーク | 八瀬の路上観察



叡山電鉄八瀬比叡山口駅。

(左から本橋仁さん、菊地暁さん、中村裕太)



西塔橋(1924年竣工)。

中央の橋脚は、高野川の大岩に据え付けられている。



ケーブル八瀬駅(1925年開業)。

本橋 「(駅舎の鉄筋の柱が)120度の部材ですし、オーダー(古代ギリシア・ローマ建築にみられる装飾様式)を意識しているなと思いました。明らかにオリジナルで発注した部材だと思うんですね。」



なぜスクラッチタイルの横目地が太いのかを解説する本橋さん。



八瀬霊苑内の石黒宗磨・とうの墓石。

菊地 「ぱつと見、新しい石材ばかりなので新しい墓地なのかなと思っていたんですが、各家の墓域を見ると元々の墓地から改葬したんだろうなと思いました。八瀬では、それぞれの家に隣接するようところに墓域があつて、ちっちゃい石塔が集まっているところを「古墓」と呼びます。墓地を改装した時に古墓から石塔を持ってきて、ついでに新たにでっかい墓石も建てたということなんだろうな。」



墓石の横には石黒が所有していた観音菩薩の石像。

(1985年11月に八瀬陶窯より移設)



菊地 「石の6つの側面に一字ずつ、南無阿弥陀仏という文字が彫られています。埋葬前に棺をこの上に乗せて、お経をあげます。」



街道沿いには石仏とともに「愛宕灯籠」^{あたごとうろう}が点在し、お札箱には愛宕神社の札が納められている。愛宕灯籠の左側には小さな石塔が集まった古墓。

中村 「街道を歩いていると石仏が多いですね。」

菊地 「比叡山が近いっていうのがあるかもしれませんね。鯖街道は日本海と京都を繋ぐルートの一つですし、比叡山の塔頭みたいなのがいっぱいあったのかな。」



民家の玄関先に飾られた弓と矢。

菊地 「八瀬は八瀬天満宮が氏神になるんですが、変わっているのが氏神の祭祀をする神主を地元の氏子から選んで1年間かけてお務めをします。一般には一年神主って呼ばれるんだけど、この辺では「高殿こうどの」って呼ばれています。それを担当した方に白羽の矢が立ったということを示すためなのか、弓と矢が与えられて、それが玄関に飾られます。弓と矢があると高殿の勤めた家なんだということが分かるし、勤めた年からしばらくはぶら下げておくみたいですね。高殿は今も続いているんだけど、1年間身を清めて神様に奉仕しなきゃいけないというのは、サラリーマン生活を送る人がマジョリティになっている世の中でかなり辛いことなんですよ。ある時期までは仕事をリタイアした人が勤めたりしていましたが、最近は例えば1年間は無理だから2ヶ月で交代して6人でやろうとか。」



中村 「この物件は路上観察学会編『京都面白ウォッチング』（新潮社、1988年）で藤森照信さんが撮影された物件ですね。菊地さんが巨人になっていますが、なんでこの物件はこうした不自然な遠近法のようなプロポーションになったんでしょうか。」

本橋 「元々は普通の四角い建物だったんじゃないかなと思うんですよ。軒の端がそのまま真つすぐ行つた延長線までちゃんと屋根があつたんじゃないかなと。ただ道がガツつと通される時にカットされちゃう家がありますね。カットに合わせて屋根も切っちゃうと斜めになる。けれど機能的には、こんな必要はないわけだから完全に遊びですよ。」

菊地 「この道はバイパスが通る前のメインルートです。だからどこかのタイミングで道を拡幅した時に切断されたのかな。大原女が薪を担いで通ればいいぐらいの道だったかもしれませんが、この辺にすごい急坂があつて大八車で通るのもしんどかつたという話を聞いたことがあります。」



八瀬集落の中心を流れる高野川沿いを歩く。



京都市左京区八瀬出張所の郷土資料コーナー。今和次郎『日本の民家』（岩波文庫、1989年初版は1922年）を発見。今和次郎は1920年に八瀬に民家調査で訪れている。



続いて、菊地さん、本橋さんが関わられた「今和次郎日本の民家再訪プロジェクト」による雑誌掲載号（「八瀬の高級」『住む。』35号、2010年11月秋号）を発見。

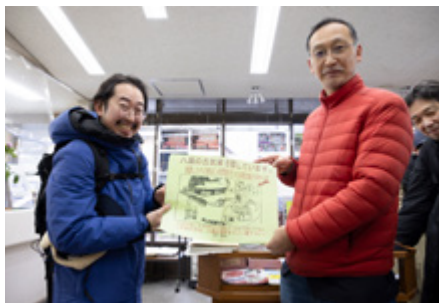


さらに、本橋さんが八瀬出張所の北村十喜雄さんとやりとりされた書類(ファックス)をまとめたファイルを発見。

菊地 「14年前のファックスとの対面ですね。」

本橋 「嬉しいですね。「日本の民家」再訪調査委員会ってファイルになっていますね。最後こういうまとめ方をするんだな。」

菊地 「ちゃんと公文書として。」



本橋 「これは現物の民家探しのチラシですもんね。当時、出張所の方が掲示板のガラス窓に貼ってくださったものです。」



日本の民家再訪プロジェクトの調査で当時ご協力いただいたお宅にご挨拶。



お住まいの方のご好意で、お宅の中の間取りも見せていただきました。



戦時中に建築学者・建築家の西山卯三が疎開していた民家あたりから八瀬の集落を望む。



八瀬かまぼろ。672年の「壬申の乱」で背中に矢傷を負った
おおあまのおうじ
 大海人皇子が、八瀬を訪れて竈風呂で治療に当たった。八瀬の地名の由来は、「矢背」とも、急瀬、岩瀬が多いためとも言われる。現存する窯の制作時期は不明だが、1895年の第4回国勧業博覧会を記念して作られた可能性が高いとされる。



杉本苑子『京の里八瀬・大原』（淡交新社、1965年）に掲載された
やおいさかじぞうそん
 「矢負坂地藏尊」と見比べる。地藏の苗字は大海人皇子の矢傷に由来する。



八瀬天満宮の鳥居。



八瀬天満宮本殿。

菊地 「天満宮の本殿に鈴を鳴らす繩に巻きつけられた白い布が奉納してあったと思うんですけど、あそこには例年だと一年神主を務めた高殿の名前が入ります。けれど今年は町内会名義になっていたんです。単独の人を選べなかったってということもあると思います。やっぱり1年間神祭りに集中するなんていう生活を許さないのが、21世紀の世の中ですね。こうした風習は八瀬が一番よく残ったんだけど、洛北一帯でそういう神社があったみたいです。」



秋元神社。

菊地 「江戸時代に八瀬村が比叡山領なのか、そうじゃないのかっていう領域争いが起こったことがあって、最終的に江戸幕府にまで持ち込まれ、時の老中・秋元但馬守が「比叡山領じゃない」という裁定を下して比叡山に税金を納めなくてもいいんだという村の特権が確認され、めでたいということで「あきもとたじまのかみ赦免地踊り」ができ、現在まで秋祭りの際に境内で奉納されています。しゅめんちおどり老中秋元は、今でも本殿の横にある摂社でお祀りされています。」



後醍醐天皇御旧跡。

菊地 「そもそもなんで八瀬村が税金免除になるかという、後醍醐天皇が比叡山に逃げる時に天皇を輿に担いで山のとっぺんまで運び差し上げたところから「うい奴らじゃ」ということで、この村は天皇の代替わりごとに税金免除という書状をいただいていた。明治になって日本に地券が発行されて、固定資産税を払わなきゃいけないという世の中になったにもかかわらず、この村は地権を全部集めて宮中に預けるということをやって、一応形式上は固定資産税を払うんだけど、同額のキャッシュバックするシステムが1945年まで存在していました。前近代の特権がそこまで続いていた不思議な村です。」



八瀬八幡宮の参道沿いの畦道を歩く。



菊地 「棚田の石垣のお地藏さん。地元のおじさんが教えてくれたんですけど、お地藏さんが出てきちゃうところなんだろうな。京都の町中も、ちょっと掘るとお地藏さんが出てくることが多く、『地藏が沸く』なんて言い方をします。」

座談会 | 八瀬から何を掘り起こすのか？



「今和次郎 日本の民家再訪プロジェクト」を手さぐる

中村 伝統産業イノベーションセンターでは、今年度から本格的に八瀬陶窯をどのように活用していくのかを考えています。まず、昨年4月から8月頃までこの建物の現状を残しつつ、活用のもととしていくために最小限の改修工事を行いました。そして、8月には、「八瀬陶窯から芋づる」というタイトルで、八瀬陶窯の見学会とシンポジウムを開催しました。そうした活動のなかで、石黒宗磨の作陶だけではなく、もう少し広く八瀬という土地の風土や風習にもまず目を向けていくことを考えるようになりました。

その時、一番初めにパツと顔が思い浮かんだのがお二人でした。というのも、お二人が関わられていた『今和次郎「日本の民家」再訪』という本の研究手法に親近感を覚えたからです。あとで詳しく紹介してもらいますが、この本は1922年に刊行された今和次郎『日本の民家』のなかで紹介されている民家をおよそ100年後に再訪するというプロジェクトです。今回改めて読み返していると、今和次郎は1919年に八瀬を訪れていました。そして、お二人も2010年に調査に来られていると。それからさらに14年ほど経っていますが、まずは当時の研究を振り返ってもらえますか。

本橋 今和次郎『日本の民家』の中には、41件の民家が入っています。初版以降どんどん増えていくので、岩波版にはかなり入っています。その民家が今どうなっているのかを見るって

いう調査を早稲田大学の中谷礼仁先生が思いついて、僕はその研究室だったんで参加しました。日本各地の民家を廻って、どんどん潰していくわけです。1軒1軒には集中できないので、ある程度まとめて調査していきます。だから、その時は奈良の法蓮寺と大阪の堺と八瀬の3軒ぐらいいは巡らうっていうことでやっていました。何といったって調査が1泊2日。悠長に1週間掛けて探せないんで、事前に学生がグーグルマップとか駆使しながらこちら辺なんじゃないかとあたりをつけます。あと、役所にも連絡するようにしてたんですよ。公文書館とか市史編集室とかにつないでもらいながら、「こんな民家を探して



菊地 暁

1969年北海道生まれ。京都大学文学部卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。身長186cm。現在、京都大学人文科学研究所助教。専攻は民俗学。著書に『柳田国男と民俗学の近代——奥能登のアエノコトの二十世紀』(吉川弘文館)、『身体論のすすめ』(編、丸善)、『今和次郎「日本の民家」再訪』(共著、平凡社)、『日本宗教史のキーワード——近代主義を超えて』(共編著、慶應義塾大学出版会)、『学校で地域を紡ぐ——『北白川こども風土記』から』(共編著、小き子社)など。

るんだけど知らないですか」っていうのを、地域の人たちに先に聞いていました。だから八瀬に関しても左京区役所に連絡し、八瀬分室の北村十喜雄さんという方を紹介していただきました。今日分室で発見したファイルを見ると、割と密にやりとりしてたようですね。



『今和次郎「日本の民家」再訪』

中村 八瀬を散歩している道中、偶然に立ち寄った八瀬分室で、本橋さんと郷土資料の棚をみていたら、バツとそのファイルを見つけたんです。

本橋 『日本の民家』再訪調査委員会というファイルがあって、なんじゃこりやみたい。すごい嬉しかった。北村さんには、今和次郎『日本の民家』の資料とか送ってたんす。そしたらその資料に「民家探している人たちがいます」と書いて、分室の掲示板のガラスに貼ってくれてたんですね。それは現地来るまで知らなかったんですよ。調査日に北村さんのところに訪ねたら「貼っているよ」って。そして一同感動するみたいな。今和次郎が早稲田大学で教えていた当時、関西に古社寺に1週間ぐらいで見に行く行事があって、今和次郎も当時引率してやっているんですね。僕たちも八瀬に来た時の調査は古社寺

のツアーの後に中谷研究室だけが居残って、奈良、大阪、京都をみることになりました。だからやっていることはつながっているんです。

中村 〓 その時に菊地さんも参加されたんですか。

菊地 〓 私はこの瀝青会というプロジェクト自体は2007年ぐらいから参加しているんだけど、それで各地を訪れるのに同行して、いよいよ地元の八瀬に来るところで資料を探したりとかして、西山卯三『住み方の記』(文芸春秋新社、1965年)に八瀬の民家が載っていることを見つけてみんなに送ったりしましたね。西山卯三は、京都大学の建築出身で住居建築設計とかに多大な影響を与えるような先生ですけれども、その西山が生まれてから折々に住んできた家について、どういう住まいにどんな住み方をしてきたのかというのを書き綴った自叙伝的なエッセイです。西山は戦争末期に京都帝国大学の管轄課という建物のメンテナンスをする職員だったんですけれども、さすがに市内が危ないということで八瀬に疎開するんですね。その疎開した時の家が今麓まで見に行ったら民家なんです。田の字型っていう日本民家でよくある間取りなんだけれども、今和次郎の民家とは土間の位置が左右反対なんです。これはこれで面白いなと後日、瀝青会とは別にこの家を訪ねました。



上 今和次郎『日本の民家』 下 西山卯三『住み方の記』



本橋 仁

建築史家、金沢21世紀美術館レジストラ。博士(工学)。1986年東京生まれ。メグロ建築研究所取締役、早稲田大学建築学科助手、京都国立近代美術館特定研究員、文化庁在外芸術家研修員としてCanadian Centre for Architecture (CCA)に滞在を経て、現職。2024年より「建築討論」編集長。建築作品に「旧本庄商業銀行煉瓦倉庫」(福島加津也+富永祥子建築設計事務所と協働、2017年改修)、編著書に『クリティカル・ワード 現代建築』(フィルムアート、2022年)、『ホルツ・パウ 近代初期ドイツ木造建築』(TOTO出版、2022年)など。キュレーションした展覧会に「第14回ベネチアビエンナーレ日本館」(2014年)、「分離派建築会100年建築は芸術か?」(2020年)など。

中村 〓 現地調査はどんなプロセスで進めていくんですか。

本橋 〓 民家ってその地域にいくと割と同じような形をしているんですね。こんな典型的な民家はその集落の中で見つけるのってハードじゃって思われるかもしれないんですけど、さっきの土間が反対とかっていう細かい特徴から見つけてきたりするんですね。今和次郎の「民家見聞野帖」という資料を工学院大学が所蔵しているんですが、そこに住所とか名前とか書いてあったりするパターンもあります。けれど八瀬に関してはそうした表記はなくて、地図が書いてあったんだけど、どうもそのエリアではないんじゃないかってことになり、結構難航しました。

ただ土間が正面に向かって右手に付いてる民家はイレギュラータイプなんです。そして、瀝青会で調査した民家はこのタイプでした。

中村 || 今和次郎も民家を調査していく時に村役場の人に協力してもらったりしていたんですか。

菊地 || 民家の中の平面図を書いてからちらつとは中を見たんだと思うけど、今和次郎も学生引率で来ていたんでしょし、そんなに中をしっかり見る時間があつたわけではないんだと。そう思ったのは、八瀬天満宮の「高殿」という神様の祀り方は、かなり変わったやり方をしていて、そのために仏壇を閉じたり結構ハードなことをしないとイケない。そうしたこの村のかなりユニークな特徴みたいなものがスキップされています。住居の本だから仕方ないというもあるんだけど、ワンショットサーベイみたいな。いや、それでもこれだけ色々調べられるんだから偉いだけだね。

中村 || そもそも今和次郎が京都の中で八瀬の民家を選んだ理由はなんだと思いますか。

菊地 || 謎ですね。わりと当時よく今和次郎がやるのは、電車で行ける終点まで行って、その辺でちよつと歩くということをやっていました。当時、叡山電鉄は八瀬比叡山口駅までは届いていなかったんですが、宝ヶ池駅まではきていたのでもちよつと足を伸ばしたのかもしれないね。



今和次郎
「郊外町の生成過程の模型図」「日本の民家」

本橋 || 『日本の民家』って後半に採集篇があつて、前半は論文があるんですが、スコットランドのパトリック・ゲデスという研究者の都市分析の方法論を援用しているところがあります。都市はアメーバ状に拡がっていきますが、その端が鉄道の終着点になっています。今和次郎は「郊外町の生成過程の模型図」という断面ダイアグラムを描いています。こういったある線に向かって町がどのように変化していくかをみていく時に一番終着点から見ていくことを大事にしているのではないかという話もあります。

中村 || そもそも日本の民家を再訪するプロジェクトをやらうとした動機はなんだつたんですか。

菊地 || 日本の人々の住まいとか住空間とかというのは、どうい

風に変わってきたのかというのを調べたいと思った時に、例えば重要無形文化財に指定された民家だと、特別の民家の100年の歴史みたいなのは追えるかもしれないけど、それはノーマルケースではないんじゃないかということで、じゃあどうやってサンプリングするかっていうことを考えた時に、中谷さんは今和次郎を選んだ民家というのは指定文化財でも何でも普通の家なので、これの100年後、もう一回見に行けばそのスパンの変化が分かるんじゃないかと。今和次郎がセレクトしている民家って今どこにあるか分かんないので、これを辿っていくことによって、普通の住空間の100年スパンの変化を追えるだろうという希望的観測のもとにはじまったのがこのプロジェクトでした。

本橋 || 典型的な八瀬の民家の状況を調査するんじゃないんですよ。あくまでも個人の住宅だからファミリーヒストリーを通して土地を見るのが大事で、だからこの民家っぽいのがあつたってだめなんです。これ反転して似ているよねとか、この家族のヒストリーでいいかじゃなくて、今和次郎が行ったところをピンポイントでやっていることがかなり重要。その時に我々は間取りの変遷は調査できるけど、その地域の変遷とかその家がどう暮らしてきたかみたいなのとか、環境はどう変わってきたんだとかってことって結構いろんな視点が要るじゃないですか。学際的にやらざるを得ないので、民俗学の先生とか、ランドスケープの人とか、色んな人と一緒にやっていました。

中村 || 41件の民家をめぐって、判明したのは何件ぐらいあつたんですか。

本橋 || 見つけて特定までしたのは20件ぐらい。家族を特定することなので、民家が残っているかいないかはあんまり関係ないんです。

菊地 || 増改築でいろんなパーツが付け加わつたりしているんだけど意外としぶとく生きていますね。実際にちゃんと暮らし続けている民家もあれば、廃村みたいになって、でも仏壇があるから麓に移り住んでご家族が今でも時々帰って管理されていることもあります。それぞれの家に物語がありますね。

石黒宗磨と八瀬陶窯を手さぐる

中村 菊地さん、今回八瀬陶窯に来られていかがでしたか？

菊地 民家に作業場をくっつけた感じですね。普通に八瀬にありそうな民家と言うところが面白いなと思ったけど、もともと集落あったところではなくて、戦後になって家が増えてきたようなエリアですね。



中村 建物自体は1936年に建てられています、八瀬の集落の中でも、ちょっと離れた場所ですね。建築から見て本橋さんいかがですか。

本橋 かなり質素ですよ。今日見た民家なんかよりもはるかに柱や梁なんか小さい。通常、住宅で一番大事にされる部屋って、床の間や仏間で、そこから居間、納戸、トイレになるほど材料のクオリティが落ちていきます。だからそうした裏の空間に悪い材料を使っているのは分かるんですけど、表にいい材料があるかっていうと、わりと節が多い。それこそ八瀬の民家に見られるようなベンガラを木材に塗ってないですよ。もちろん建てられた时期的にも材料の調達が難しかったかもしれませんが、かなり意識的に質素にしたのかもしれない。

中村 意匠的に魅力的なところはありましたか？

本橋 やっぱり作業場じゃないですか。あれが玄関なんですか？



中村 富樫木人「陶人・石黒宗磨 一會はずに歸るの記—」（『美術と趣味』第5巻第2号、美術と趣味社、1940年）という文章があります。富樫さんは、石黒に会いたくて八瀬に来たけど、結局会えなくてとうさん（妻）と話して帰ったという文章なんですけど、そのなかでとうさんが、「玄関のありません家でして…」と語っているんですね。

本橋 しかも普通の民家は入ったところが土間っていうイメージはあるんだけど、この家は、キッチン建物の反対側にありますよね。しかもキッチン周りは近代的で、お風呂も一緒だし、トイレも建物の内部にあります。だから近代住宅だと思っんです。

中村 八瀬陶窯を近代住宅として捉えるのはすごく面白いですね。玄関がないので、扉を開けたら石黒が座ってロクロひいていて、それを入り口から囲炉裏越しに見えるという。八瀬での暮らしぶりを演出していくような側面もあったかもしれないですね。そうした生活の一端を紐解いていく視点としても今和次郎の活動って面白くて、『日本の民家』のあとに『民俗と建築 平民工芸論』（磯部甲陽堂、1927年）という本を書きます。そのなかの文章やスケッチなんかを見てみると、明らかにその関心は、建築そのものよりもそこで暮らす人々のふるまいに移行していきます。このプロジェクトでも石黒の作陶にまつわる生活の側面をそうした眼差しで見たいと思っています。



本橋 今和次郎って別にレトロスペクティブに古いものを礼讃していたわけではないんですね。たとえば、民家研究と並行して生活改善運動もやっている人なんです。内井乃生さんという今和次郎の助手をしていた人から千葉の房総を今和次郎と巡っていたときの話を聞いたことがあります。房総も茅葺きの民家がいっぱいあるんですけども、屋根にはほとんど銅板をかけた方がいいって啓蒙していったそうです。生活改善運動でもキッチンに窓を空けた方がいいとか、生活の動線もぐちゃぐちゃなので直した方がいいよって。今和次郎は、農村の生活を見て記録していきますが、別にその生活を残していくっていう視点はないんです。そうした意味で今回八瀬陶窯の建築を見ていて面白かったのは、土間にあった外側

に開くことのできる木製の窓です。あれは空調としての機能をもった近代的な設備だと思うんです。そうした意味で石黒と今和次郎は、むしろ生活改善運動に関わる近代的な部分でつながる気がします。つまりモダニストなんですよ。石黒もモダニストなんじゃないかな。

中村 || 一般的に石黒の仕事は、中国や朝鮮の古陶磁を写していくことがイメージされますけど、器物に施される装飾のパリエーションなんかを見ていると、意外なほどに当時の美術に影響を受けています。もちろん一足飛びに繋がらないですが、あの時代の人たちが持ち得ていた近代的な産物への反応ってなにか独特な感覚がありますね。

本橋 || 京都国立近代美術館で河井寛次郎の展覧会を一緒にやったときにも感じましたね。今までそんな目で見てこなかったけれどすごいモダニストじゃないですか。電気大好き機械大好き。機械オタクが良かったな。あのような側面が石黒からも見出せるといいですね。

中村 || 河井寛次郎は、車でもスクーターでも全てが顔に見えてくるって書いていますもんね。そうした石黒の趣向に関わる部分ってこれから掘り起こしていきたいですし、このプロジェクトをどうやって開いていくのかということにも関わってくる気がします。他方で、今日お二人と八瀬を歩いていて、この土地を眺める解像度がぐっと上がりました。なによりも八瀬という土地の風土や風習が今も息づいていることを感じられました。

本橋 || ここは世界の中心なんだと思うことじゃないですか。開くのではなく、むしろ閉じるっていうこと。ネガティブなことじゃなくて。

菊地 || 朝ドラの「あまちゃん」の最後の方で、足立ユイ(橋本愛)が「私に会いたければ、みんな北三陸に来ればいい」というシーンがあったけどその境地ですね。

中村 || それって、石黒も考えていたことかもしれませんね。京都の中心から少し離れて暮らし、用事があった八瀬まで会いに来て感じ。

本橋 || 自分が中心であるって思えるのは強いですよ。地方から中央にみたいなクリティカル性じゃなくて、もう中心になっちゃっている地方の人という方が何か違うスタンスをもてる気がします。でも、八瀬がそういう場所ですよ。京都とかすっ飛ばして皇室とつながっている。今日話すまで石黒宗磨をどう見るかみたいな話だと思ってたんですけど、そうした検証活動ではなくて、もうちょっとメタ的に生活と工芸ということを考えていく。ただ、わりと全国的に今工芸ブームだからそうした生活工芸みたいなこととどうやって相対化させていくかですね。八瀬という尖った場所で石黒宗磨について考えていくのは面白いと思いました。

菊地 || 中央をすっ飛ばして世界とつながることですね。八瀬つ

ていうフィールドはそれなりに長らく付き合ってはきましたが、石黒との関係をどう捉えて、それをどう現代に開けるのかっていうのは、ちょっとまだイメージが湧かないところがあります。世界のどこにいても自立しつつ、かつ世界と繋がっていかなくちゃいけないというのは21世紀に入っていく中で、多分どこに行っても立ち現われる普遍的な課題だと思うので、それを八瀬という場所で考えることは一つのケーススタディとして面白いんだと思います。

中村 || 戦前に今和次郎が「工芸全野の讚美」(『工芸時代』第2巻第7号、アトリエ社、1927年)って文章を書いています。その全野には、いわゆる工芸を個人作家だけでなく、商品パッケージのデザインであつたり、台所での工夫から日常のふるまいに至るまで、当時、工芸とされていなかったすべての「産物」を尊重し、讚美しているんですね。さらに戦後には『工芸研究』という雑誌も作っていましたし、「工芸」という枠組みを拡張していく試みをしていたように思います。このプロジェクトも石黒宗磨の作陶を中心としつつ、その作品が生まれてきた場所として八瀬をさらに歩いていきたいと思いました。また本センターには、今和次郎のように工芸にまつわる枠組みをイノベーションしていくミッションもありますし、八瀬陶窯という尖った場所で時間を過ごしながらその魅力を掘り起こしていきたいと思っています。ありがとうございました。





研究会

手仕事の学校

School of Handcrafts

【研究会「手仕事の学校」】
 日時 2024年2月6日(火) 16:20—17:50
 会場 京都精華大学 明窓館1F キャンリアバードク

テーマ

西陣織から生まれた、 猫のための蝶ネクタイ 「JOLIE CRAVATS」の展開

ゲスト

松田 梓 タイヨウネクタイ株式会社

聞き手

米原有二 伝統産業イノベーションセンター

和装産地としてのイメージが強い西陣織ですが、日本有数の織物ネクタイ産地でもあります。図案や撚糸、製織など細分化された分業生産体制には、織物産地の強みがあらわれています。今回はタイヨウネクタイ(創業1907年)の松田梓氏を講師に招き、西陣におけるネクタイ生産の歴史と現状や、時代に応じた製品企画・製造について伺いました。また、本学デザイン学部プロダクトデザイン学科ライフクリエイションコースとの産学連携の成果についてもお話いただきました。

本稿では一部を抜粋して掲載します。





米原—— 松田さんは3日前にミラノでの展示会から帰ってこられたばかり。とてもお忙しい時期にお越し頂いてありがとうございます。今日は、西陣におけるネクタイ生産の状況や、タイヨウネクタイの歴史、そして新しい製品として猫のための蝶ネクタイ「JOLIE CRAVATS」の企画段階や展開についてお話を伺えればと思います。

松田—— よろしくお願ひします。弊社は西陣織ネクタイの生地及び製品の製造と販売をしています。メインは生地の製造なので、自社の1階に織機が計9台あります。ジャカードのレピア織機、シャトル織機、手織を織る生地の特徴ごとに使い分けています。

創業は1907年、明治40年ですね。私の曾祖父が創業者で、当初は帯地や着物の裏地を製造していました。1931年(昭和6年)に2代目の祖父がネクタイ生地製造に着手します。1946年(昭和21年)に発表したオリジナルの「玉園織」^{たまぞのおり}の生地が高い評価を得て、本格的にネクタイ製造業として歩むこととなります。玉園織は別珍生地の製織方法に工夫を加えて凹凸を表現したものです。1992年(平成4年)に私の父が3代目になり現在に至ります。

米原—— 海外市場への挑戦はいつ頃からですか？

松田—— 私が入社したのが2013年。ご存じのとおりネクタイ製造は斜陽産業なので、「自社の技術を活かして何ができるか」と考えていました。弊社の一番の強みは生地が製造できることだ、と考えて2017年頃かファッションのテキスタイルやプロダクト開発に着手してきました。そのなかで、国内市場だけでは厳しいと感じてきました。国内の同業ではまだ海外市場に挑戦している企業はないこともあって海外に挑戦し始めたところです。

西陣織ネクタイ

松田—— (スライドのグラフを示し)これは、私が入社した当時と現在のタイヨウネクタイの売上比率です。全体の売上高はそれほど変化はありませんが、比率をみるとネクタイ生地の割合が下がっています。その数字を埋めるようにしてテキスタイルやプロダクトに関する割合が上がっている。

米原—— ネクタイ生地のOEM生産(委託者ブランド製造)から、自社商品生産に変化しつつあるということでしょうか？

松田—— それもあります。でも、もっとも大きな変化は取引先が広がったこと。ネクタイ生地の取引先はかなり限られて

いますが、ファッションなどさまざまな分野で使ってもらえる生地としては、さまざまな業界が対象になります。

今の危機感は、生産側の人材について。西陣織の平均年齢は70歳以上で、高齢の職人さんたちが技術や知識をたくさん持っている。とても危機的な状況です。

米原—— 社内の技術継承も課題ですし、同じ西陣のなかの分業先も心配ですね。西陣織産地のなかで、タイヨウネクタイさんのようにネクタイを専業とする織物業、工房が多いことはあまり知られていないですね。

松田—— 明治から昭和初期頃にかけて和装の帯地などから転業した会社が多かったみたいです。西陣の伝統技術を活かしたネクタイ生地の生産が盛んになった頃ですね。

米原—— 同じ時期(明治~昭和初期)には、ジャカード織機の技術革新などで帯地を中心とした西陣織全体が生産量を伸ばしていますね。

松田—— 日本に洋装が入ってきた頃に、ネクタイの需要は高まるけど国内では作れない。そこで、織物産地としての西陣にネクタイ生地の依頼があったようです。当時は海外のネクタイの見よう見まねで始まったそうです。

西陣織を「生地」として売る

米原—— 西陣では、織物を帯やネクタイといった製品として仕上げるのが一般的です。製造工程は西陣の伝統技術で共通している部分も多いですが、それぞれを帯屋さん、ネクタイ屋さん、と呼びます。いま、タイヨウネクタイさんは生地として販売することにチャレンジをしています。洋服や自動車の内装、インテリアなど可能性が広がります。製造側で用途を限定せずに生地を提供するのは、国内の繊維産業全体の傾向でもありますね。

松田—— 以前は織物工場が流通や販売について行動することはなかったんですが、仕事を待っている会社が成立しない時代になりました。全国の各産地でファクトリーブランドが立ち上がって、織元がブランドをつくるようになりましたね。

米原—— 桐生(群馬県)や丹後(京都府)などの大きな織物産地でも、長く国内外の販路開拓に取り組んでいますね。もとは裏方だった織物産地がブランドとして一歩前に出ている。

松田—— うちの強みは、日本におけるネクタイの歩みが蓄積されていること。日本でネクタイが普及した時期に創業しているので、ネクタイに関する技術や知識の積み重ねがあることです。

もうひとつは、ネクタイ生地を、ネクタイ以外にも使える生地として展開している会社がほかにはないこと。これまで世の中になかった生地を製造できる経験と技術があることです。

米原—— 企画から製造まで一貫してできるのは大きいですね。柄の蓄積はどのくらいあるんですか？

松田—— ざっと数えて1万柄くらいです。(ジャカード織機で織機に用いる)紋紙として残っているものだけで1万程度で、資料や記録に残るものを入れるとそれ以上になります。

米原—— 大昔の柄であっても、解釈を変えてまた活用できる。柄の蓄積は大きな資産ですね。

猫のための蝶ネクタイ

松田—— コロナ以前までは、よく各地のデパートの物産展にネクタイの販売に行っていました。私なりに若い人に向けたデザインを持っていくのですが、通りがかるお客さんには「渋いなあ」と言われることもあって、製品よりも「西陣」というイメージが先行して印象を持たれてしまうのかな、と感じていました。

そんな悩みを持っていた頃に、京都府の若手職人支援プロジェクトの「京都職人工房」に参加して、金谷勉(有限会社セントプロデュースデザイン 代表取締役/京都精華大学 デザイン学部客員教授)さんたち、デザイナーさんの色んな意見を聞いて視野が広がりました。

米原—— どうすれば西陣織のネクタイを手にとってもらえるか、という試行錯誤で猫の蝶ネクタイに行き着いたのは面白いですね。この「JOLIE CRAVATS」は、従来のネクタイの消費者層とはまったく違うお客さんに訴求した。

松田—— おかげさまでメディアにたくさん取り上げて頂いて。西陣のなかでも、ネクタイ業界のなかでも、タイヨウネクタイはちょっと違うことをする会社として知ってもらう機会になりました。もちろん販路もこれまでとはまったく違います。人間用のネクタイと同じ柄でも、猫用の小さなネクタイだと柄のサイズを小さくしたり配置を変えたりすることでバランスをとっています。うちでは、常時400色程度のストックがありますが、一般的な(人間用の)ネクタイでは使う色はほぼ限られています。



定番と言えば紺ですね。「JOLIE CRAVATS」はそういった制約から離れて作ることができたのも良かったですね。

米原—— 先日、参加されていたミラノの展示会はファッション関係者向けですね。

松田—— ほかに出展されている生地は日本でも一般的に使われているものが多く、それほど変わった生地はありませんでした。そのなかで、うちの生地はかなり異彩を放っていたとおもます。柄をメインとした紋織物。西陣では普通だけど、世界ではそうじゃない。やっぱりガラパゴスだったんだなって。

米原—— 西陣織は多品種少量生産で、企画段階で図案～製織までの設計をする。これは、小ロットの特注品に対応できるという強みでもある。

松田—— 単価は安いけど大量発注が必要な織物産地は多いです。でも、うちだと単価は少し上がるけど最低限のロットで生産できる。海外市場はまだ模索中ですが、今後も自身の強みを探しながら挑戦していきたい。海外の方には「西陣」や「伝統」の先入観はないし、それがブランドにはならないですから。

米原—— 今年度のデザイン学部プロダクトデザイン学科との商品開発はいかがでしたか？

松田—— 学生さんたちの柔軟な発想にとっても刺激を受けました。若い世代にとっては、西陣織もネクタイも身近なものじゃない。でも、そのおかげか、伝統や歴史にとらわれない魅力的な企画をたくさん出して頂きました。伝統産業であっても、規格外の自由な発想が大切なんだ、とあらためて考える機会でした。

研究ノート

博物館収蔵の現在

——九州大学歴史的什器調査と 収蔵方法の可能性

谷本尚子 Naoko Tanimoto [伝統産業イノベーションセンター員]

はじめに

九州大学総合研究博物館(以下九大博物館と略す)では、1911年以降に学内に納品された木製家具を研究対象として収集している。一般に大学で使用されて来た什器は、新しいものと入れ替える際に廃棄されるが、九大博物館では、什器を学術標本の調査・収集対象として分類・保存する方針をとっている。その始まりは2005年の校舎の移転に伴う大量の什器の放出である。九州大学箱崎キャンパスでは、第二次大戦時の空襲を免れ、戦後も大きな火災がなかったことなどから戦前からの什器が多数残されていた。最も初期のものでは、九州大学医学部の前身、京都帝国大学福岡医科大学が開設された1903年の春慶塗りの書棚、両袖机が認められる。明治末期1930年建設の旧九州帝国大学工学部本館は国指定文化財となっており、会議室などで用いられている高級家具などは当時の状況をそのまま残して保存されているが、什器の多くは箱崎キャンパスにある総合研究博物館、伊都キャンパス、伊都標本資料研究・教育プラザ(九州大学総合研究博物館収蔵庫)の3か所に保存されている。なお旧キャンパスの一部は九州大学の歴史的建造物の保存地区として残される予定であり、その場所に大正14年(1925年)建設の本部第一庁舎および昭和5年建設の旧工学部本館がある。九州大学総合研究博物館は、旧工学部本館内にあり、什器保存をするには非常に手狭なため、上述したように現在は3か所に分散され保存されている。今回の調査は、九大博物館による歴史的什器の保存方法と実用的価値創造の実態を確認することを目的としている。

九州大学歴史的什器保存の概要

九州大学の移転計画は、2005年後期から始まった。しかし什器救済が始まったのは2009年以降である。工学部移転で残置された什器を収集したのが始まりだった。2010年には旧応用力学研究所と旧工学部2号館、2012年には旧印刷所での廃棄が始まり、什器救済が本格的に始まる。これらの前例を引き継いで、2013年九大博物館及び農学研究院を中心にした「九州大学歴史的什器保存再生プロジェクト」が立ち上げられた。とはいえ、九大博物館もまた移転の予定があり、家具のような大型資料の収集・保管には多くの困難があった。しかし博物館館長吉田茂二郎、三島美佐子らの努力により、歴史的什器の調査・修復・保存・活用の方針が決定された¹。木製家具は産業生産品であり、日本では博物館的価値の評価は定まっていない。しかしイギリスでは古くから歴史的

家具を研究対象として保存し、研究する体制が整っており、さらに大学から出される廃棄物を再利用するためのシステムWARPitが存在している²。ただしイギリスでは伝統的に古家具を修復して流通させる文化が存在しており、それ故テキスト資料も多いからと推察される。現在、日本でのこの分野の研究は進んでおらず、学術的問いを立てることも難しい。しかし2018年の九大博物館の報告³では、研究資料的特徴と教育資料的特徴の二つの視点からの評価の可能性が提示されている。特に教育資料的特徴とされたのは、「1.工学系・芸術系・歴史系などの学生実習教材として用いることができる」、「2.近現代日本の家具・インテリア・建築の歴史資料として、展示や「在野保存」を通した一般公衆を対象とする生涯学習に貢献できる」の2点である。この在野保存において、九大博物館の歴史的什器保存プロジェクトは、これまでに無い研究資料の保存方法として、独自の価値

創造を試みていると言えるだろう。

在野保存とは、文化資源などを博物館や教育・研究機関のみならず、事業者や個人などの在野で、司会ながら保管し次世代に繋げる保存方法である。九大博物館では「九大什器保全活用プロジェクト」と題して、在野保存の方法について広く告知し、実践している。

九大什器保全活用プロジェクト

歴史的什器を保存していく方法として現在研究者が取り組んでいるのが「九大什器保全活用プロジェクト」である。これは移転に伴い古い木製家具が大量に廃棄処分されるのを避けるため在野保存を呼びかけたもので、農学部・文学部などを中心に遺棄される歴史的什器を救済し、修理し、元の状態をほぼ保ったままで活用するプロジェクトである。九大博物館什器保全活用プロジェクトは、修理と保存のために2018年に2度のクラウドファンディングを行なっている。同時に木製什器を生かして地元のアートユニット *qulte* と協働した特別展示企画『活きる木製什器展「知春草生 春草ノ生ヲ知ル」』（2013年3月11日～3月18日）を開催した⁴。すなわちこのプロジェクトでは博物館がアートや地域社会と連携することを軸としている。クラウドファンドのサイトでは、下記のような記述がある。

この研究では、上述したような「一体どうするの?」という疑問や社会的課題に応えるためにも、回収した学校家具を、活用文化資源として在野^{*}で使い続けながら保存し(在野保存)、次世代につなげられるような仕組みを考え、それを社会実験を通して実践的に検証していきます。

^{*}在野とは、官公庁ではなく民間、という意味あい使われる言葉ですが、私たちはもう少し、自分自身に近い感覚である世間一般や一般家庭のような意味合いも含めて使っています⁵。

前述した欧米文化圏の WARPit では大学自体がリサイクルを推進しており、その取引データは大学の持続可能性への取り組み状況を評価し、その順位を公開している。しかし日本では、大学の廃棄物に関して大学制度上、他者に譲渡することは難しい。これに対して九大博物館では、什器を博物館内で用いる[図版1、2]以外に、福岡県内の公共団体のみならず、民間の店舗など各所で様々に活用している。

博物館及び在野保存の実際

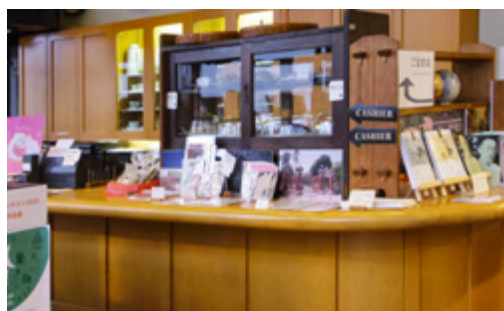
今回の在野保存の調査では、初日に箱崎校舎の近隣にある「空カフェ」、福岡県立美術館にある喫茶室、福岡市六本松にある猫本専門の書店「吾輩堂」、Artist Café Fukuoka を訪問した。これらの店舗は基本個人が経営する書店やカフェであり、九大博物館とは個別の信頼関係が成立してのち



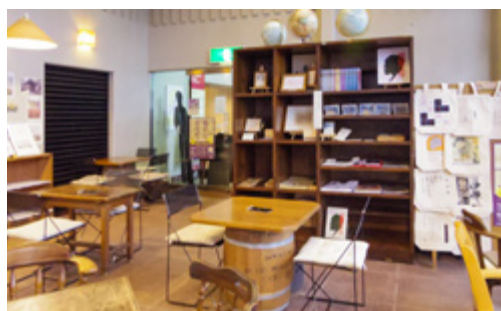
[図版1] 九州大学博物館 工学系資料開示室



[図版2] 九州大学博物館 レクチャールーム



[図版3] 福岡県立美術館喫茶室のガラス扉付棚



[図版4] 美術館喫茶室 書棚



【図版5】 ナツメ書店 1階 | 本棚とテーブル、椅子の一部が九大什器保全活用プロジェクトのもの。



【図版6】 アーティスト・カフェ・福岡 コミュニティ・スペース



【図版7】 九州大学博物館伊都標本資料研究・教育ランチ

永年貸与という形式が取られている。修復に関しては、大川家具工業会のヨコタウッドワーク⁶が手掛けている。

奈カフェは古いアパートの一室を改装して設計された小さなカフェであり、机がカウンターとしてそのまま使われていた。福岡県立美術館の喫茶室では、引き戸の付いた棚にガラスを付けた商品棚【図版3】や机などが修復され、使われている。また、大型図書の多い美学・美術史研究室の本棚は、図版4に見られるように、展示棚として転用しやすく、人気があるという。図版4の棚には所属「美学・美術史」のラベルが貼られたまま、棚の由来が判る状態で用いられている。

ナツメ書店には大型家具が数多く導入されており、本棚とテーブル、椅子などが見られた【図版5】。下に引き出しと木製板の引き戸があり、上の段にガラス戸の付いた収納棚(展示物に著作権があり、写真は撮れなかった)は、白くペンキが塗られており、原形を留めていないのかと思ったが、大学にあった時分から白色に塗られていたものだという。

在野保存された先の一つ、Artist Café Fukuokaは、古い小学校の校舎をリフォームしたアーティストレジデンスの施設であり、ここではアーティストの創作活動を支援し、アートを街に繋げていく活動が行われている。廊下や各制作室にも九大什器が用いられている他、コミュニティスペースでは、多くの書棚や引き出し付の机、さらに両袖机も導入されていた【図版6】。ここはアーティストだけでなく誰でも利用できる

スペースであり、導入された什器の由来を説明する小さなパネルが置かれていた。

調査二日目には九州大学総合研究博物館 伊都標本資料研究・教育ランチを訪問後、伊都キャンパスの展示状況を確認し、大野城市心のふるさと館内の「ふるさとラボ」、福岡県古賀市の「ナツメ書店」を訪問した。

九大博物館伊都標本資料研究・教育ランチは、床面積約2,175平方メートル、天井高6メートルの大型のプレファブ倉庫を利用した収蔵庫であり、什器だけではなく、鉱物見本や化石類、歴史的な工作機械類などが保管されている【図版7】。また什器に関しては、修復・クリーニング作業もこの場で行われている。

続いて九州大学の工学部と農学部、図書館などの校舎にて展示保存されている資料を確認していった【図版8】。その他、学内の学生を含む展示、企画の場であるフジイギャラリーやギャラリー1(G-1)、ギャラリー2(G-2)などでは、アップサイクル⁷した什器が置かれていた。

最後は在野保存先、大野城心のふるさと館にある「ふるさとラボ」、福岡市南区にある菓子店 harapeco. Lab.、春日市にある「ナツメ書房」を確認した。これらの店舗ではアップサイクルされた什器が、しかし元の塗装のまま用いられていた。以上のように、在野への貸与は個別の面談を経て行われており、定期的に博物館員による確認もなされていた。また



[図版8] 九州大学農学部資料展示室



[図版9] リペア事例

什器の状態は、現状復帰が可能な範囲での修復とアップサイクルが試みられていた。

什器の修復とその意義

図版9は両袖教授机を修復した事例である。九大博物館のプロジェクト室に置かれたこの机には、次のような文面のキャプションが置かれていた。

戦前、おそらく法文学部創設時の導入品と思われる。移転時の文系火災より前に、誰かが丁寧に集めて保管してくれていた高品質な木製什器類のひとつ。丸みのある取っ手は、同時品がほぼ全て真鍮製であるなか唯一木製であり、大変珍しい。寄付者出身学部ゆかりの品として展示中。

塗装落し、クリアーまたは着色アクリル塗装仕上げ
リペア：有限会社ヨコタウッドワーク(大川市)

プロジェクトで再生された什器の多くが収集時点での状態で保存されているのに対して、この修復では、新品当時の仕上がりを再現している。こうした修復を施されるのは、初期に大学へ納入され、特に重要と考えられる什器に限られている。修復・修繕費は、博物館にとって大きな問題であるが、当時の木工家具の加工技術、材料、塗料などを調査・研究する上で重要な意義を持っている。九大博物館における歴史的木製什器コレクションにおいては、修復・修繕を行うつつ、調査・研究が始められたばかりだといえよう。

まとめ

今回の調査を通じて、博物館所蔵の歴史的什器の収集と保管について、以下のような今日的な傾向を知ることができた。1つは国立大学の博物館であっても収集物を社会に還元する方法を見つかることができるのではないかと提案で

ある。三島はこれに「活用文化財」という定義を提案している。これは近年のリサイクル、リペア需要の拡大とも合致しており、これからの可能性が期待できる。

2つ目は、修復を通した近代木工家具の研究の可能性である。この場合、過去の技術を研究するという目的と、現在の職人の活用、技術の継承という目的が果たせる。

3つ目は、所有権に関する未解決の問題である。上述したように国立大学の廃棄物管理は、厳格に行われる必要がある。これに対して利益を得ないとしても一度廃棄としたものを民間に譲るとなると、現在の制度上の変更が必要になる。以上、「九州大学歴史的什器保存再生プロジェクト」についての調査を報告する。

1 | 三島美佐子・新井竜治・真保晶子・吉田茂二郎・岩永省三・折田悦郎著「活用文化財としての歴史的木製什器の在野保存——新たな文化財概念の確立とその保存活用方策に関する実践的研究——」、トヨタ財団2017年度研究助成プログラムTYTID-17-R-0714 報告書(2023)

2 | 国外の大学では、大学で開発・運用されているプラットフォームシステムがあり、イギリスの17大学、オーストリアの2大学では、個人取引を含む「WARPit (WARPit: Waste Action Reuse Portal)」というフォームが活用されている。スタッフが不要になった家具、事務用品、実験装置などをWARPitに寄付し、それをオンラインで必要な人に売るシステムだが、ほぼ送料にかかる費用以外は実質無料となっている。

<https://www.warp-it.co.uk/howitworks>

3 | 新井竜治・三島美佐子著「九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクションの評価と課題」九州大学総合研究博物館研究報告、15-16合併号、69-85、2018

4 | https://bookskubrick.jp/news/post_988

5 | <https://readyfor.jp/projects/kyudai-furniture>

6 | ヨコタウッドワーク | 〒831-0041 福岡県大川市小保968 | 電話：0944-86-3822

<https://yokotanodesk.com/>

7 | アップサイクル：本来であれば捨てられる廃棄物に、デザインやアイデアといった新たな付加価値を持たせることで、新しいものにアップグレードして再生すること。

Research Presentation

Japanese Traditional Kites: From Regional Studies to the World of Arts

日本の伝統凧 —— 地域研究から芸術の世界へ

Cecile Laly セシル・ラルイ | Researcher, Center for Innovation in Traditional Industries

A series of conferences on International Japanese Studies, titled “Kyoto Lectures” is organized monthly by the Kyoto offices of the École Française d’Extrême-Orient (EFEO) and the Scuola Italiana di Studi sull’Asia Orientale (Italian School of East Asian Studies, ISEAS), held in their shared building located in the Northeast of Kyoto. I had the honor of being invited to give a conference on my work on Japanese kites and to introduce the collaborative book *Cerfs-volants du Japon : à la croisée des arts*, which was published under my supervision by the Nouvelles éditions Scala at the end of the summer of 2021. The conference took place on January 22, 2024, both on-site and online, and it gathered a total of 36 attendees. In this report, I would like to share a summary of one of the main points that I developed during this conference.



Flier of the Kyoto Lecture:
Cecile Laly, *Japanese Traditional Kites:
From Regional Studies to the World of Arts*,
EFEO & ISEAS, Kyoto, January 22, 2024.

One of the first things to do when researching a new topic is to look for bibliographical references. When I began researching Japanese kites at the end of 2013, I found references written both in the Japanese language and in Western languages¹, and while going through those references, two facts immediately struck me. First, the literature that focuses on Japanese kites, both in Japanese and foreign languages, was written mainly by members of the amateur community, namely kite fliers and collectors; almost no texts were written by academics. Second, there were significant differences in the way kites were presented in the texts written in Japanese and the ones written in Western languages.

In Japanese texts, which are far more numerous, kites are considered *kyōdo gangu* (traditional toys) and *meibutsu* (regional specialties). Additionally, these texts echo the perspectives of Regional Studies (*chiiki gaku*). They look for the appearances of kites in the old Japanese texts to pinpoint the arrival of kites in Japan and the beginning of regional kite traditions, especially in the case of cities currently holding kite festivals. They also look for the origin of the vocabulary, from the import of various Chinese characters describing an “eagle made of paper” to the creation of a Japanese insular vocabulary (such as “flying squid” in the West of the country and “flying octopus” in the East) with the insertion of furigana along the Chinese



Kyoto Lecture: Cecile Laly, *Japanese Traditional Kites: From Regional Studies to the World of Arts*, EFEO & ISEAS, Kyoto, January 22, 2024.

characters first, and then with the creation of the Japanese kanji 凧, which can be read both *ika* (squid) and *tako* (octopus) depending on the region.

The Japanese books are also illustrated with numerous photographs presenting various kites, including black and white and color photographs taken in photo studios. These images depict a frontal and closely framed representation of diverse kites. The controlled lighting of the photo studio creates transparency, allowing the bone structures glued to the back of the kites to appear through the paper of their sails. Sketches of the bone structures with indications of where to attach the lines are sometimes added in the annex of the volumes. Indeed, the same type of kite can include various models from one region to another, each with its bone structures. More importantly, those photographs are presented in a geographical order, from north to south, with various kite models classified by prefecture and then by areas within the prefecture. Several books by important members of the amateur community published in the 1960s and 1970s were tirelessly titled *Nihon no tako* (Kites of Japan)² emphasizing the Japanese specificity. It's worth noting that a series of DIY books titled *Wadako* (Japanese kites), published in 1999 by Ōhashi Eiji 大橋栄二 (Seibundō shinkōsha 誠文堂新光社), divided the geographical presentation of Japanese kites

into separate volumes: one on kites from the Hokkaidō and Tōhoku regions; one on kites from the Kantō, Shinetsu, and Hokuriku regions; one on kites from the Tōkai and Kinki regions; one on kites from the Kyūshū region; and finally, one on kites from the Shikoku, Chūgoku, and Okinawa regions.

In comparison, the books published by Westerners, which are much fewer in number, provide a different approach to the kites of Japan. The crafted objects are often referred to as “paintings for the sky”, and there is a regular use of the lexical field of art with words such as “art”, “artist”, and “creation”. Because they are considered paintings for the sky, the illustrations are mainly pictures of kites flying in blue skies, their natural exhibition spaces, and these are in color photographs. The kites are also sometimes presented in the space of their creation, the atelier, occasionally alongside their creators, the kite-maker. Unlike Japanese books where kite names usually refer to the place of origin, and captions rarely provide the names of kite makers, books by Westerners pay special attention to finding and praising the makers for their talent. In addition, one of the books published by Westerners presents a collection of ukiyoe featuring kites and illustrates how all cultural products of the floating world were intrinsically linked during the Edo period.³



Poster of the International Symposium
Cerfs-volants du Japon : à la croisée des arts,
December, 20-21, 2018, Galerie Colbert, Paris



Front cover of the book:
Cecile Laly, *Cerfs-volants du Japon : à la croisée des arts*,
Lyon : Nouvelles édition Scala, 2021.

As an art historian, I must admit that I began working on Japanese kites in 2013 because, when I first spotted Japanese kites among the various Japanese toys kept in the collections of the Quai Branly Museum, I also perceived them as paintings, that is to say, objects I was used to working with. Although in France, fine arts and crafts are clearly divided and organized following a strict hierarchy, it didn't feel like too much of a stretch to develop a research project on Japanese kites despite my academic background. I had been focusing on Japanese arts since my master's course, and in Japan, the taxonomy and the hierarchy of arts and crafts are different. Lines are blurrier and categories are often permeable.

After years of work and conducting several research projects on Japanese kites, as well as their relationship to the world of arts, I organized an international symposium on Japanese kites⁴ and then supervised the making of the volume *Cerfs-volants du Japon : à la croisée des arts*. The book became more than mere symposium proceedings. Indeed, with the help of several private collectors, I gathered 330 color illustrations mainly presenting kites, kite paintings, or art pieces featuring kites. For each kite and kite painting, the makers and the iconography have been researched and mentioned where possible. Part of the project was to produce a scholarly resource

that would facilitate future research on Japanese kites and arts; therefore, making makers and iconographies available was of primary importance. But, as pointed out during the Q&A at the end of the conference, by doing so, the making of this book unintentionally participated in the process of the artification of Japanese kites that I have been observing and analyzing for several years.

¹ | My working Western languages are especially French and English.

² | A book titled *Nihon no tako* (Kites of Japan) was published by Tawara Yūsaku 俵有作 and Nakano Keizaburō 中野啓三郎 in 1964 (Bijutsu Shuppan-sha 美術出版社); another one was published by Tawara Yūsaku 俵有作 and Sonobe Kiyoshi 磯部澄 in 1970 (Kikkasha 菊華社); one titled *Nihon no tako daizenshū* (The Complete Collection of Kites of Japan) was published by Saitō Tadao 斎藤忠夫, Modegi Shingo 茂出木心護, Hiroi Tsutomu 広井力, and Hike Ichirō 比毛一郎 in 1977 (Tokuma Shoten 徳間書店); then a new volume titled *Nihon no tako* was then again published by Niizaka Kazuo 新坂和男 in 1978 (Kadokawa Shoten 角川書店).

³ | See: Cecile Laly, « Iconographie, utilisation et représentation des cerfs-volants d'Edo : entre humour et insolence », in Laurent Baridon, Marie Laureillard, *Caricatures en Extrême-Orient : origines, rencontres, métissages*, Paris : Hémisphères éditions/Maisonneuve & Larose, 2024, p. 65-76.

⁴ | International Symposium *Cerfs-volants du Japon : à la croisée des arts*, December, 20-21, 2018, Galerie Colbert, Paris.





開催協力 Cooperation

浮世絵木版画彫摺技術保存協会主催

第四回 浮世絵木版画作品展

伝統の技を受け継ぐ人達 #浮世絵からマンガ・アニメまで

東京と京都の木版工芸組合が母体となって設立された浮世絵木版画彫摺技術保存協会による作品展の開催協力をしました。期間中は、職人による摺り・彫りの実演や木版画摺りの体験会も実施。京都国際マンガミュージアムを会場に、サブタイトルの「浮世絵からマンガ・アニメまで」を体感する展示となりました。

浮世絵木版画彫摺技術保存協会主催

第四回 浮世絵木版画作品展 伝統の技を受け継ぐ人達 #浮世絵からマンガ・アニメまで

会期 | 2023年11月23日(木・祝) — 2023年11月28日(火)

会場 | 京都国際マンガミュージアム 1階 多目的映像ホール





淡田 明美 Akemi Awada

京都精華大学美術学部 デザイン学科 ビジュアル・コミュニケーションデザイン専門分野卒業。自動車会社にて「CUBE」「MARCH」「TIIDA」などの内装カラー&マテリアルデザイン開発に携わる。退職後、フリーランスとして携帯電話や住宅の塗料開発に従事しながら、ルリユール(製本工芸)を学ぶ。現在、針畑生活資料研究会にてデザインの観点から、生活道具・食について調査・記録している。



セシル・ラリ Cecile Laly

フランス生まれ。パリ・ソルボンヌ大学美術史学院博士課程修了。2014年、ケブランリ博物館の特別研究員として和風コレクションについて調査し、和風の研究を始める。その後、同テーマについて複数論文を発表。主な論文・書籍に「王子稲荷神社と装束稲荷神社の風市と火伏風 —日本の風文化を支えるイベント—」(2018年)、「Appropriation de l'espace terrien et aérien par les cerfs-volants」(2020年)、「Cerfs-volants du Japon」などがある。



谷本 尚子 Naoko Tanimoto

1962年生まれ。室町の呉服問屋で幼少期を過ごす。ウィーンの工芸デザイン、ロシアの近代デザインを研究テーマとした後、近年、京都の家具の歴史と現場の調査を行なっている。2021年から京都精華大学に所属し、伝統産業イノベーションセンターの活動に参加する。



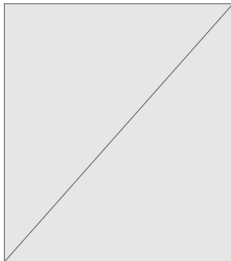
中村 裕太 Yuta Nakamura

1983年東京生まれ、京都在住。2011年京都精華大学博士後期課程修了。博士(芸術)。京都精華大学芸術学部准教授。〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点から陶磁器、タイルなどの学術研究と作品制作を行なう。近年の展示に「第17回イスタンブール・ビエンナーレ」(パリン・ハン、2022年)、「眼で聴き、耳で視る | 中村裕太が手さぐる河井寛次郎」(京都国立近代美術館、2022年)など。著書に「アウト・オブ・民藝 | ロマンチックなまなざし」(共著、誠光社、2022年)、「アウト・オブ・民藝」(共著、誠光社、2019年)。



米原 有二 Yuji Yonehara

1977年京都府生まれ。京都を拠点に工芸を対象とした取材・執筆活動をおこなう。2018年に京都精華大学伝統産業イノベーションセンター長に着任。工芸を起点とした社会研究・教育に取り組む。おもな著書に『京都職人 一匠のてのひら―』、『京都老舗 一暖簾のころ―』（ともに共著・水曜社）、『京職人ブルース』（京阪神エルマガジン社）、『近世の即位礼-東山天皇即位式模型でみる京職人の技術』（共著・青幻舎）など。



井上 朔実 Sakumi Inoue

大学職員



Kyoto Seika University International Partner Universities and Institutions

京都精華大学 協定校／機関

USA

- University of Michigan School of Art and Design
- Bard College
- Southern California Institute of Architecture (SCI-Arc)
- Cornell College
- Rhode Island School of Design (RISD)
- California College of the Arts
- The Cooper Union School of Art
- ArtCenter College of Design
- International English Language Institute Hunter College, City University of New York

Canada

- English Language Institute, University of British Columbia

Brazil

- Escola da Cidade Sao Paulo

UK

- University of the Arts London / Chelsea College of Arts
- University of the Arts London / Camberwell College of Arts
- The University of Edinburgh / Edinburgh College of Art
- The Glasgow School of Art

Italy

- Romualdo Del Bianco

the Netherlands

- HKU University of the Arts Utrecht
- Gerrit Rietveld Academic

Germany

- Braunschweig University of Art
- Kunsthochschule Kassel

Finland

- Aalto University (School of Arts & Design & Architecture)
- The Arts Academy at Turku University of Applied Sciences

France

- L'École Nationale Supérieure d'Architecture Paris-Malaquais
- L'École de Design Nantes Atlantique
- Paris College of Art
- École Spéciale d'Architecture
- L'École Nationale Supérieure d'Art de Limoges
- Centre international d'études françaises (CIDEF)
Université catholique de l'Ouest

Belgium

- Wallonie-Bruxelles International
- École Nationale Supérieure des Arts Visuels de La Cambre

Turkey

- İbn Haldun University

India

- Indian Institute of Technology Bombay

Indonesia

- Maranatha Christian University

Korea

- Daegu University
- Hongik University

Thailand

- Chiang Mai University

Taiwan

- Providence University
- Taipei National University of the Arts
- National Museum of Taiwan History
- Soochow University

Hong Kong

- Chu Hai College of Higher Education

Vietnam

- Vietnam National University Hochiminh City /
University of Social Sciences and Humanities
- Hue University of Sciences

Senegal

- Université Cheikh Anta Diop de Dakar (UCAD)
- Université Gaston Berger

Nigeria

- Kwara State University

Cameroon

- Université de Maroua

Republic of Mali

- Institut des Sciences Humaines
- Conservatoire Des Arts Et Métiers Multimédia Balla Fasseké Kouyaté (CAMM-BFK)

Burkina Faso

- Université Joseph Ki-Zerbo

Australia

- The Australian National University School of Art & Design

New Zealand

- AUT International House, Auckland University of Technology

Japan

- International Research Center for Japanese Studies
- Research Institute of Humanities and Nature
- Okinawa University
- Sapporo University
- The Faculty of Law and Economics, Okinawa University
- The Faculty of Foreign Languages, Sapporo University
- Kyoto University
- Kyoto city Zoo
- Kyoto Prefecture
- Nagahama city
- Tadotsu town
- Seika town
- Sakyo ward, Kyoto city
- Eizan Electric Railway Co.,Ltd.
- KYOTOGRAPHIE
- The Embassy Of The Republic Of Benin

Email dento2@kyoto-seika.ac.jp

Website <https://dento.kyoto-seika.ac.jp/>

Instagram/Twitter @seika_craft

Center for Innovation in Traditional Industries Partner Insitutions



國立臺北藝術大學
Taipei National University of the Arts

京都精華大学
伝統産業イノベーションセンター
イヤーブック2023

Center for Innovation in Traditional Industries
Yearbook 2023
Kyoto Seika University

発行日 | 2024年3月31日

編集 | 米原有二
デザイン | 川越健太

発行 | 京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター
〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137

